



# マイ・ピュア・ガール

前橋梨乃

公開版

*for Smart Phone*

(注)

この小説は1992年に書かれたものです。  
したがって、後半舞台となる「香港」  
は、中国返還の5年前という設定です。

## Contents

Chapter1 『運がよけりゃ』

Chapter2 『アイム・ア・オーディナリー・マン』

Chapter3 『スペインの雨』

Chapter4 『君住む街で』

Chapter5 『踊り明かそう』

Chapter6 『時間どおりに教会へ』

★タップすれば各章へジャンプします

Chapter 1

『運がよけりや』

「……しかし、それにしても驚いたよ。君と東京で会うとはな」

「この前はたしか、シンガポールの華僑協会のパーティー

イーに、君がゲストとしてやって来た時だろう。してみると、五年ぶりかな」

「おたがい歳もとるはずだ」

「そんなことはない。君はまったく変わらんよ。四十年代、いや、三十代と言ったってとおるくらいだ」

「苦労を知らないからかもしれないな」

「はは、まったくだ。しかし、その苦労が、もうじきやって来るんじゃないのかな。一九九七年には」

「いや、そんなに心配しちやいないよ。北京はきつと約束を守る」

「五十年条項か？ サツチャーと調印した御大が生き  
ているうちはまだいいが、やつは俺たちよりずっとじ  
いさんだからな。支配者が変われば、以前の約束はぜ  
んぶ反故ほごになる。それが中国歴代王朝の歴史ってや  
つじやないのか」

「国際世論だつてある。そう簡単に香港を変えること

はできんよ」

「そんなことを言つて、君だつて、いつでも逃げ出せるように、カナダあたりの市民権をとつてるんだらう」

「私は、死ぬまで移住はしないよ」

「とぼけなくたつていい。今こうして日本にいるのだつて、莫大な君の隠し財産を海外へ移すため。……ちがうか？ 日本の不動産屋かなにかをトンネルにするつもりだな」

「そういう話は、こういう席ではまずいな」

「大丈夫さ。隣のボックスでホステスとじゃれ合っている君の奇妙な秘書を除けば、まわりはすべて日本人。こうして広東語で話していれば誰もわかりやしない」

「国の言葉だから、なおさらまずいということだつてある」

「……北京のスパイ、か？　心配することはない。やつら銀座のこんな高級クラブにスパイを送り込むほ

ど、予算をもつちやいないよ」

「まいったね、君の独断にも。オックスフォード時代とまったく変わってないな。まあ、いずれにしてもだ。

私は北京政府をそんなに恐れちやいない。だいいち、私の銀行は、今では広東省の三十以上の工場に出資してるんだ。私は、北京の一大協力者ってわけさ」

「人民を搾取する大資本家が共産政権の協力者？ :

: ふふ、もし本気で君がそれを言ってるんだったら、

噴飯ものだ。北京の連中が好意を持っているのは、君の財力にであつて、君自身にじやないだろう」

「そう、そのとおりだよ。人間にとって、じつは社会体制なんて問題じやない。政治がどうであれ、人間が知恵をめぐらせ動くのは富のためだ。富のためなら、人間はいくらでも変わる。だから、財力さえ握っていれば、北京の連中だつて私の味方になるってわけさ」

「そんなに甘いものかな。世の中には金で動かん人間

だって、いるだろう」

「たしかに、たまにはそういうやつもいる。だが、たったひとりそんな人間がいたってなんにもならないんだ。そのまわりには、意地汚い拝金主義者どもがうようよいるんだからな。やつらの前に金をちらつかせて環境をつくってしまおう。そうすりゃあ、さしもの潔癖主義者だってひとたまりもない。主義主張どころか、性格だって変えるよ。私なら、かたくなな人間を、ま

「まったく別の人格にだってしてみせるね」

「なるほど。それが、生まれついでとの金満家の哲学つてわけか。中産階級出身の、成り上がりの外科医には、とても言えないセリフだね」

「少なくとも私は、これまでの人生、そんなふうにも人を動かしてきたんだ。けっきょく貧乏人なんて、そんなものさ」

「ほお、国では言えないことも、言葉のわからない外

国でなら、いくらでも言えるってわけか。よし、そこ  
まで言い切るのなら、たとえばこういうのはどうだ？  
さつき、金を使えばまったく別の人格だつてつくれ  
ると言ったな。じゃあ、男を女の人格に変える。それ  
ができるかな？」

「ふふ、なるほど、君の専門分野できたな。むずかし  
いだろうが、私なら、一年あればやってみせるね」

「一年？　言ったな。じゃあ、賭けるか？　もし君に

それができたら、シンガポール郊外の私の別荘を進呈しよう。できなかつたら、君がスイスの銀行に持っている隠し口座のひとつを私の名義にする。それでどうだ」

「面白いじゃないか。どうせ将来はどうなるかわからん財産だ。その話に乗ろうじゃないか」

「ふふ、やっと本音が出たな」

「で、条件は？」

「そうだな……。今、このクラブにいる日本人の男のうち、誰かひとりを、一年後には処女のような娘に変身させる。もちろん、性格までもだ。人前に出ても、大方の人間が女だと信じて疑わないようなら、君の勝ちだ。誰にするかは君が選んでいい」

……。

南関東信用金庫の貸付係長、安藤康夫は、このとこ

ろ、やたらついていた。

仕事が、うそのようにとんとん拍子に運んでいくのだ。  
だ。

長い間の窓口や営業の業務を離れ、本店貸付係になったとたん、地場の大メーカーからの融資依頼が舞いこんできた。康夫は、相当な駆け引きが必要になるだろうと腹をくくっていた。

ところがどうだ。そんな康夫の心配をよそに、あれ

よあれよと言ううちに、利率や条件は、こちらが提示した線ですんなり話がまとまってしまったのだ。

康夫はそんなに努力したつもりはないのに、この大口融資が成功したのは康夫の力だと、上司たちはこぞって評価してくれる。この秋には課長昇進の辞令が出るだろうと言ってくれた重役もいる。

その上、そのことに端を発して、プライベートも妙に充実してきた。

だいいちに先方の企業がやたら接待してくれるのだ。大企業ならどこにでもある決算書の粉飾臭い部分に目をつぶったことを感謝してか、それとも単に康夫のことを気に入ったのか、先方の財務担当者があれこれ誘ってくれたりする。先日の日曜日は、一流コースでゴルフ。そして昨夜も、康夫など一生縁がないと思っていた、銀座の会員制クラブで、ご馳走になった。そしてもうひとつ、以前はそんなことはいっさいな

かったのに、本店に来て、「デキるやつ」と目された  
せいか、女子行員にけっこうモテだしたのだ。

今夜も、仕事が終わってから、ついさっきまで、お  
なじ課の坪井里佳とふたりきりで飲んでいた。

最後には、カクテルのせいでほんのり目尻を紅らめ  
た里佳が、「係長、私、なんだか今夜、アパートへ帰  
りたくないの」とまで言ったのだった。もちろん、康  
夫もグラリとききたが、そこはわが身大事のサラリーマ

ン。ぐつと我慢して、タクシーを拾い、里佳をひとり押し込んだというわけだ。その時、康夫の脳裏に、妻、豊子の鬼のような形相が浮かんだせいでもあるが：  
：。

「けつきよく、俺の人生、今になって、運が向いてきたと言うことか：：：」

康夫は、快速電車の車窓を過ぎる夜闇の工場地帯に目をやり、ニヤニヤ笑いながら、独り言を言った。

そもそも、康夫が人生のツキから見放されたのは、豊子と知り合ってからだ。子ども時代から高校までも、けっして運の強い方ではなかったが、まあ、人並にはツキに恵まれることもあった。

それがどうだ。大学時代、豊子と知り合ってからというもの、人生の坂道を悪い方へと転がりつづけたのだ。

東京の二流大学だったが、何とかストレートで合格した康夫は、高校時代からキーボードをいじっていたこともあり、バンドをやりたくて軽音楽クラブに入った。その夏合宿の打ち上げコンパでのことだった。

そのクラブに、グリーンフィールズという、当時でも少なくなり始めていた純粹カントリーバンドがあった。主要メンバーは、二年上の先輩たちだ。そもそも音楽の嗜好がちがった康夫などは話も合わなかったの

だが、そのボーカルだった豊子だけは、入部した当初から、康夫にさかんに話しかけ、なにくれとなく世話をしてくれた。

豊子は当時から、体重七五キロはあろうかという大女。御面相もごつく、まちがっても「きれい」などとは言われたことはないだろうという容姿をしていた。それに対して康夫の方は、身長一五九センチと小柄だが、どちらかと言えば端正な顔立ちである。

正直言つて、康夫は、そんな豊子の態度が迷惑だったのだが、先輩でもあり、好意を持たれて悪い気もしなかつたので、適当につきあつていた。

で、その日。打ち上げコンパの場所になつた炉端焼屋でも、康夫が席に着くなり、豊子はその横に腰を降ろした。そして、露骨に康夫の肩にしなだれかかるようにして飲んだのだつた。

十一時をまわつた頃だつたらうか、自宅通学の女の

子から順に、メンバーたちが抜けていき、コンパはお開きとなった。

なりゆき上、泥酔した豊子を康夫が送っていくようなかたちになってしまった。片手にキーボードのケースを持ち、一方で豊子の巨体を支え、自らも酔っている康夫は、ふらふらと豊子の下宿先のアパートまで行った。

豊子は、ドアの鍵孔にキーを差し込むことさえでき

ないくらいに酔っていた。ついにはへなへなとコンクリートの廊下に座り込んでしまふ始末。しかたがないので、康夫がその体を抱えるようにして、部屋の中へと運び込んだ。

そして、豊子をベッドに寝かしつけようとした時だった。

豊子が豹変したのだ。

康夫の顔を見て、にかつと笑ったかと思うと、体の

向きをくるりと変えて、康夫を巻き込むようにして、ベッドの上に倒れ込んだ。つまり、康夫がベッドに押し倒されたのだ。

豊子は酒臭い息を吹きかけながら、康夫にキスしてきた。康夫は必死に抵抗したが、しよせんは体力の差で豊子にはかなわなかった。

豊子は康夫の口に舌を差し込み、強引にこじ開けると、やがてその手をつかみ、自分の豊満な胸へと押し

あてた。

当時は康夫も、血気さかな十八才。たとえ相手がどんなであろうと、そこまでされれば、体の方が勝手に興奮してしまふ。その上、豊子は自分の方から積極的に脱いでいったりするのだ。

けつきよく康夫はその夜、豊子を抱いた——と言うより、抱かれたという方が正しいのだが……。

それだけだったら、少々変わってはいても、まあ、

学生時代にはありがちなアクシデントである。

しかし、その「事故」は、それだけでは終わらなかつた。

その夜の、たった一回のセックスで、豊子は妊娠したのだ。

豊子のことを必死に避けていた康夫が、豊子からそのことを知らされたのは、すでに妊娠四ヶ月を経過した頃だった。その「強姦事件」の真相がどうであれ、

こうなれば、加害者は康夫、被害者は豊子という図式  
ができあがる。

その上、それが豊子の策略だった証拠に、それを打ち明けられた喫茶店の、豊子の隣の席には、豊子を五割増ししたくらいの巨体で、まるでその筋の人のように恐い顔をした豊子の父親が座っていたのだった。

二人から迫られ、気弱な康夫は、その場で結婚の約束をさせられていた。

さて、それからが大変だった。

豊子を入籍し、同居した康夫は、昼間学生をしながら、深夜のアルバイトに精を出し、妻とお腹の子の二人分の食費を稼がなければならなくなった。

楽しいはずだったキャンパス生活もどこかへ吹っ飛び、オイルショック後の不景気の中で、康夫は必死に働いた。

翌年三月、大学を中退した豊子は、長女の百合を産

んだ。康夫の苦労をよそに、嘘のような安産だったと言う。こうして康夫は、不本意ながらも、十九歳で一児の父となったのだ。

子どもが生まれたら生まれたで、生活費はこれまでに倍加してかかる。康夫はさらにアルバイトを増やし、毎日、くたくたになりながら学生時代を過ごした。単位ぎりぎりだったとは言え、四年で卒業できたのが、奇跡のようだ。

康夫がやつと一息つけたのは、就職難の中、なんとか今の信用金庫に職を得て、サラリーマンになってからだ。

ところが、その頃になると、豊子は典型的な強妻になつていた。やれ給料が安い、やれ出世が遅いと、康夫のことをなじり責めたてるのだ。まるで自分の人生を台無しにしたのは康夫だと言わんばかりに……。

事実、康夫は、職場の中で目立った活躍もできず、

同期の中ではいちばん出世が遅れていた。しかし、それは康夫のせいばかりでもなかった。学生時代に疲れきり、燃え尽きていたこともあったし、家庭で疎んじられ、責められ、やすらぎの場が少しもなかったせいでもある。

なんでそんなにまでしても豊子と別れなかったのかと言われれば、答えようがないが、少なくともそれは、豊子を愛しているからではなかった（もちろん、娘の

百合に対しては、すくなからぬ愛情はあるが……。  
情けない話だが、たぶんそれは、ただひたすら、豊子  
が恐かったせいだ。

しかし、こんな人生とももうそろそろ別れを告げら  
れそうなのだ。

係長昇進がいちばん遅かった康夫だが、同期の中に  
まだ課長になった人間はいない。これで、いつも自分

を馬鹿にしている豊子の鼻を明かせるといふものだ。

「ざまあ見ろ」

ほろ酔い機嫌の康夫は、夜道を歩きながら、自宅のあるマンションを見上げて言った。

と、突然、康夫は何かとてつもなくでかい鉄の塊に、ぶつかっていた。

「痛てーっ」

体を折り曲げ、強打した腹のあたりを押さえながら

顔をあげると、それはリムジンだった。全長八メートルはあるかと思われる黒塗りのリムジン。

「……？」

康夫は痛さも忘れて、首をかしげた。

リムジンは康夫の住むマンションの正面玄関に、歩道に乗り上げるようにして停まっていた。じつはこのマンション、康夫の信用金庫が全室借り上げ、社宅として使っているものだ。だから住んでいるのは、勤め

る支店はちがっても、すべて同僚である。こんな車を持つている者はもちろんのこと、そんな金持ちの親戚や友人のあるやつなどいるはずもない。

康夫は思わず運転席をのぞき込んだ。

と、二人のサングラスの男たちがこちらを睨み返してきた。一人はスキンヘッドの大男。そして、もう一人は長い髪を後ろで結んだ青白い男である。二人とも、黒いスタンドカラーの制服のようなものを着ている。

「右翼かな……？」

その眼光の鋭さ（実際は、サングラスをかけているのでわからないのだが）にたじろいだ康夫は、ぶつぶつ言いながら、マンションへと入った。

エレベーターを六階で降り、わが家の鍵をあけて中へ入ると、娘の百合が、玄関の電話の前の廊下に座り込み、なんだか耽美的な感じのイラストが描かれた雑誌を読んでいた。現在十四歳の百合は、どこか変わっ

た子だ。ふだん友だちと遊んでいるような時は、ごくふつうの女子中学生なのだが、どこか妙に大人びたニヒルなところがある。

「ただいま」

康夫が声を掛けると、百合は初めて気がついたように顔を上げ、言った。

「あ……お帰りなさい。さつきから、ママ、ぷんぷんよ」

「えっ？」

もうそれだけで、靴を脱ぎかけていた康夫の体は硬直した。

と、その声を聞きつけたのか、豊子がキッチンから飛び出してきた。

「なに、あんた。遅かったわね！」

「い、いや、ま、また、しつこい接待があつて……」

里佳のこともあり、何となく後ろめたい康夫は、ま

るで重戦車が突進してくるような豊子に対し、うわずった声で言い訳をした。

「なによ、あの中国人。あんた、変なサラ金から借金でもしてるんじゃないでしょうね」

「……ほ？」

豊子の口から出た「中国人」というわけのわからぬい単語に、康夫は思わず、すつとんきような声をあげた。

「夕方からずっと、リビングに座りっぱなしで、あんなのことを待ってるのよ。気味が悪いったらないわよ」

「ちゅ：：中国人？」

「とにかく早く追ばらってよ。おかげで好きなドラマも見れなかったんだから」

康夫は、わけがわからないまま、豊子に押されるようにリビングに入った。

その途端、思わず、ぷっと吹き出しそうになってし

まった。

リビングのソファに座った中年男は、まるで絵に描いたような中国人だったのだ。紫の中国服に、髪の毛は頭皮に貼りつけたように固め、おまけに口のまわりにどじょう髭まで生やしている。

いまどき、こんな太平天国みたいな中国人がいるんだらうか。これなら、たとえ本人が名のらなくたって、豊子にも中国人だとわかったはずだ。

「おー、あなた、アンドヤスオさんあるね」

おまけに、しゃべり方まで典型的な中国訛の日本語だった。

「はあ、なにか……」

中国人が、その怪しげな見かけによらず、人懐っこいような笑顔で話しかけてきたので、康夫は、いぶかしみながらも、向かいのソファに腰を降ろした。

「私、こまたよ。ほんとに困た。私のこと、助けて欲

しいあるよ」

中国人はいきなりそう言った。

「ちよつと、あなた、いったい……」

「あ、これは失礼したある。私、陳宋源いうある。香港人あるよ。私、アンドさんに、折り入って頼みある。怒らずに聞いて欲しいあるよ」

陳と名乗る中国人はそこまで言うのと、突然表情を一変させて、リビングのドアに鋭い視線を向けた。

「廊下で立ち聞きしてる奥さんも、入ってきて聞くよろし。奥さんにも関係ある話ある」

その言い方に有無を言わせぬ強さがあつたせいだろう、さすがの豊子も弾かれたようにドアを開けて部屋に入ると、ばつの悪そうな顔をして、康夫の横に腰掛けた。

「謝謝」

陳はまた、一瞬にして人懐っこそうな笑顔に戻った。

「腹立てずに聞いてくれるあるか？」

さっきのこともあり、陳の素性に薄気味悪さを感じている康夫と豊子は、ほとんど同時にうなずいていた。

「私の主人、王龍星いいいます。香港の大金持ち。銀行二つと、何十という会社持つてるある」

陳はそんな話から切り出した。

「その主人が、悪い病気かかったある」

「……ガン、ですか？」

なんとなく場がもてないのだろう。豊子が口をはさんだ。

「そう。悪性の脳腫瘍。あと、よくもつて二年の命、お医者さん言ったある」

「二年……」

「本人もそれ知ってるある。で、気弱なつて、もうひとつの悪い病気はじまった」

「もうひとつの病気……女関係、ですか？」

豊子が言ったので、康夫はちよつとあわてて、目配せした。

「いや、それ、ちがうある。占いあるよ」

「占い……？」

「そう。前から、主人、占い凝ってた。事業で迷ったとき、よく占いの先生に見てもらって決めた。でも、それ単なる趣味みたいなもんだったある。それが、病気になるってから、前以上に信じるようになった。毎日

の全部のこと、占いで決めるある」

それが自分たちとどう関わるのか、康夫にも豊子にもわからず、二人は首をかしげた。

「それだけなら、まだよかったある。主人は大金持ちあるから、占いの先生にどんなこと言われても、たいていのこと、どうにかなったある。でも、死を目の前にした主人、安らかに死ぬために、どうしてもしたいことあったある。主人には、この世に心残りのこと、

ひとつだけあるね。それは死んだ奥さんのこと」

「奥さん……」

「正確に言えば、奥さんになるはずだった人ある。結婚式のその日に死んだあるから」

「結婚式の日……。つまり、初夜になにかあって？」  
また豊子が言ったので、さすかの康夫も、肘で豊子を小突いた。

「いや、ちがうある。処女のまま。なにしろ、教会へ

向かう途中、事故にあったあるから」

「交通事故、ですか？」

「いや。黒社会、ホッセイウイわかるあるか？」

「ホッセイ……、何ですか、それ？」

「香港のヤクザ、マフィアあるよ。その抗争事件に巻き込まれたある」

「うわ、映画みたいだ」

「ウエディングドレス着たまま血まみれなった花嫁抱

いて、その時、主人おいおい泣いたある。主人は、康麗様のこと、心より愛してた。あ、その人、朱康麗いきました。康麗様を失って三三年間、ずっと独身だったことでも、主人の気持ち、痛いほどわかるあるね」

なにか、自分自身が昔のことを懐かしむように、陳は感傷的な顔をした。

「それで、いったいあなた、私たちに何が言いたいんですか？」

さすがにちよつと焦れてきて、康夫がきいた。

「あ、そうそう。それで、主人は、信奉する占いの先生に、康麗様にもう一度会いたいという叶わぬ思い打ち明けたある。すると、占いの先生とんでもないことを言い出したある。康麗様の生まれ変わりが、生きていると」

「生まれ変わり？」

「はいな。それきいて、私の主人、ぜひ、死ぬまでの

間、その人といっしよに暮らしたい、言い出したある」  
「で、その生まれ変わりってというのは、誰なんです  
か？」

康夫は、不安そうに、しかし、じつはちよつと期待  
を込めてきいた。

もし、その生まれ変わりというのが豊子なら、少な  
くとも二年間はやっかい払いができるというものだ。

大金持ちなら、謝礼だって弾むにちがいない。やっぱ

り俺はついている……。

「あなたある」

陳は、康夫の方を指さして言った。

「えっ……！」

康夫は絶句した。

「占いの先生言うには、康麗様の生まれ変わり、康麗様が死んだ同じ時刻に、日本の横浜市戸塚区で生まれた人間。そして、名前に『康』の字のつく人。主人の

命令で、私と私の部下たち、戸塚区の戸籍と産婦人科の病院しらみつぶしに当たったある。すると、その条件に合うのは、どう探してもあなたしかいなかったあるよ」

「し：：しかし、私は男ある」

動転した康夫は、陳の口ぶりがうつってしまっているのにも気づかない。

「私たちも、それだけが気がかり。で、国帰って、も

う一度、占いの先生にきいたある。すると、占いの先生、こう言ったあるね。男になって生まれていることもある。でも、本人がどう言おうが、中身、康麗様その人だ、と」

「そ、そんな……」

「お礼はいくらでも出すある。どうか、私の主人の願いかなえて欲しいあるよ」

「いくらでもって、どのくらいなんですか？」

陳の言葉に、豊子が身を乗り出した。康夫は本能的に身震いした。

「あなたたち一生贅沢しても、まだ使いきれないくらい。億に零が三つつく単位ね。もちろん日本円あるよ」

「へえ……」

豊子は、ゆっくりと顔をこちらに向けた。その顔はいつか見た顔。……そう、あのはじめての夜、康夫に襲いかかってくる前の、あの顔だ。

「ただし、ひとつ、条件、あるね」

陳がつづけたので、豊子はまた、陳の方を向き、康夫は大きなため息をついた。

「私、死の近い主人にショック受けさせたくないある。

康麗様が、こんなしよぼくれた男になつてるなんて、

主人知ったら、きつと大ショックね。康麗様は、香港一の美人と言われた人あるから」

「しよぼくれたって、あなたね……」

康夫は思わず言いかけ、豊子ににらまれて口をつぐんだ。

「性転換しろとは言わないある。せめて女装させて、女らしくしてから主人の前に出したいある」

「じよ、女装：：！」

康夫は、助けを求めするように豊子の方を見た。

いくら鬼のような女でも、自分の妻である。夫が女装して、人の妻になるなんて、そんな話、納得するは

ずはない。

ところが豊子は、陳に向かい、しなをつくりながら、ふだんは絶対にしないような言葉づかいで言ったのだ。

「そりやあそうですわよねえ。あなたのお気持ち、よくわかりますわ。おほほほ……」

「じよ、冗談じゃないよ！」

康夫は叫んだ。

Chapter2

『アイム・ア・オーデイナリー・マン』

「ハロー。先刻は電話をもらったのに失礼した。毎週火曜は、新華社香港支社長との昼食会があつてね」

「なるほど、返還後のことも考えて、影の中国大使を接待ってわけか」

「何と言つても同胞だからね。イギリス人とより、通じる部分は多いよ」

「おやおや、数年前までは頑固なイギリス派だった人間が、今や北京政府の茶坊主になったとは、こりや驚きだ」

「何のことだか、わからんな」

「ふふ：：君がかける国際電話なんて、誰が盗聴しるとも知れんしな。君の銀行の中にだってスパイはい

るってわけだ」

「もうよさないか。さっきの電話はそんな戯れ言のた  
めか」

「オックスフォード留学時代から、大金持ちの子息ら  
しく悠然としている君には、屈折した感情を持ってい  
てね。そんな君が、返還を前に、オタオタするのを見  
るのは、じつに楽しいんだ」

「べつにオタオタなんてしちやいないさ。で、用件は

なんなんだ。例の賭けの件か？」

「そうそう。君の秘書の陳が、ご親切なことに、日本から報告書をファックスしてくれたよ」

「私が出すように指示したんだ。私の手元にも同じものが届いているよ。ギャンブルは公平にいききたいからな。今後、例の男を女に変えるために私がしたことは、逐一、君の所にもレポートさせるつもりだ」

「しかし、君も大嘘つきだな。リアリストで独身主義

者の君が、占い師のご託宣で死別した処女妻の生まれ変わりを探してるだと。しかも、君は脳腫瘍で、あと二年の命ときた。よくもまあ、こんな俗っぽいストーリーを考え出したもんだ」

「ふふ。すべて陳の発案さ」

「そんな陳腐な道具立てで、人ひとり騙せるのかね」

「いや、陳はこういうことにかけてはや、天才的だからな。私はうまくいくことを確信しているよ」

「しかし、現に、あの気の小さそうな男が激怒したら  
しいじゃないか」

「だが、彼の妻はずいぶん心を動かされたようだと、  
陳のレポートにも書いてあったろ」

「大事なのは本人だからな。君は、彼の人格まで変え  
てみせると言ったんだぞ。本人に、まったくそのケが  
ないのに、どうしてそれができる？」

「まあ、待てよ。レースはまだ始まったばかりなんだ

から。陳のプログラムどおりことが運ぶとすれば、一週間以内に私はまた、日本に出向くことになる。勝負はそれからさ」

康夫は珍しく腹を立てていた。

もちろん、心の中で怒ることはあるのだが、その怒りが表に現れず、かつ持続しないのが康夫の性格だ。

ところが今回は、一昨日の夜、あの中国人を大声で

追い払った時から、腹だだしさが続いている。

あの男の主人とやら、香港の大金持ちだかなんだか知らないが、人を馬鹿にするにもほどがある。三三歳の妻子持ちの男をつかまえて、女になって暮らせだつた。死を間近にひかえて、狂つたのだとしても、人をいったいなんだと思ってるんだ。

豊子も豊子だ。

いくら百億千億という金の話を持ちかけられたにし

ても、そしていくら聞きしにまさる強妻だとしても、自分の亭主を女にしようなどというばかげた話にあんなに乗り気そうな顔をすることはないじゃないか。だいたい、そんな額の金の話を持ち出すこと自体、あの男のインチキさの証明だ。そんな金は、へたをすりゃあ、僕の勤める信用金庫の年間預金高より多いんだから。

康夫は、そんなことを口の中でぶつぶつ呟きながら、

勤め先近くの喫茶店で焼肉定食を口に運んだ。

まったく、もう……。

「係長、ここいいかしら？」

突然のすずやかな声に顔を上げると、同じ課の坪井里佳が立っていた。

「え？……ああ、かまわないよ」

康夫の気持ちは、いっぺんに浮き立った。里佳は今日も美しい。

「私も同じものを」

注文を取りに来たウェイトレスにそう言うと、里佳は康夫の顔を真正面から見つめた。

「ん、：：どうかした？」

里佳の視線が気になり、康夫は箸をとめた。

「よかった」

「なにが？」

「係長、私のこと、避けてるんじゃないかと思って」

「どうして？」

「一昨日のこと。酔っぱらって、私、なんだか恥ずかしいこと言ったでしょ。それで、係長に軽蔑されたかと思って」

「ああ、そんなこと考えてたの。軽蔑なんてとんでもない。君がもう一押ししてたら、僕は君の魅力に負けてたな」

「まあ……」

里佳は、頬を赤らめ、恥ずかしそうにうつむいた。

そんな里佳のそぶりに、じゅうぶん気を引かれながらも、豊子の顔を思い出し、これ以上、この話題に深入りしない方が身のためだと考えた康夫は、話題を変えた。

「そういえば、君、今朝、なんだかばたばたと動きまわってたけど、どうしたの？」

「え？：：ああ。部長が、房総電機製作所の融資関係

の書類を、会議室に持って来いって」

「房総電機？」

それは、康夫が最近大口融資の話をまとめた企業だった。

「会議室って、誰がいたの？」

「それが、取締役会のメンバーが全員。頭取もよ。私、なんにも考えずに入って行って、びっくりしちやった」

「おかしいな、今日は定例の取締役会の日じゃないだ

ろ。それにしても、なんで房総電機の……？」

「あ、もしかしたら……」

「なに？」

「係長、課長昇進の話あるんでしょ。それじゃないかしら」

「えっ、僕の？　冗談はよせよ。人事の時期には、まだ早いだろう」

「でも、房総電機と言えば、うちがずっと融資したく

てできなかつた県内のトップ企業でしょ。係長、それをまとめたんだもの、特別についてことだつてあるわ」

「おいおい、あんまり喜ばせないでくれよ」

康夫は内心ほくそえみながらも、そう言った。

「安藤君、ちよつと来てくれたまえ」

昼食を終え、持ち場に戻るなり、そこで待っていた部長が声をかけてきた。

康夫は、もしかすると里佳の憶測が正しいのかと、期待に胸を弾ませた。

部長に連れられ、会議室に入ると、里佳の言葉どおり、全取締役がテーブルについていた。

しかし、その場の雰囲気は、康夫が想像していたのとはちよつとちがった。取締役たちは、沈痛な面もちで押し黙っていた。みんな、入ってきた康夫の顔をちらりと見て、そして、目を反らせた。誰もしやべりだ

そうとはしない。

康夫はその場につっ立ったまま、だんだん不安な気持ちに襲われはじめた。

「あ、あの……、なにか……」

「安藤君」

融資担当の重役が、押し殺した声で言った。

「……はい」

「今朝、房総電機が倒産したよ」

「……えっ！」

「バブル倒産だ。土地と株に手を出していたらしい。うちに融資を申し入れたのは、資金繰りができなくなつたからだという」

「……し、しかし……、融資目的は新工場の設備投資費用だと……」

「新工場建設の話なんて、そもそもなかったんだよ」  
「そんな……」

「しかもだ。これを見てみたまえ」

重役はそう言うと、会議テーブルの上に、ホツチキスどめされた数枚のコピーを投げ出した。

「房総電機倒産がマスコミに伝わると同時に、総会屋らしいのがこれを持ち込んだ。このネタを買ってくれとな」

康夫は、おそるおそる、それを手に取った。それは、業界雑誌のゲラのようなだった。青ざめた康夫は、その

文章の見出しを目で追った。そして、がたがたと震えだした。そこにはこんな文字が踊っていたのだ。

「南関東信金、房総電機に大口不良融資」「粉飾決算見破れず」「貸付係長、供应を受け、審査に手心か？」

：  
：  
：。

康夫は、自宅への道をとぼとぼと歩いていた。

ふつうのサラリーマンが帰宅するには少々早い時間

だ。康夫以外には、学校帰りの高校生しか歩いていない。

康夫の頭の中は混乱を極めていた。まだ自分でもよく整理がつかない。

：：あの後、会議室に呆然と立ち尽くす康夫の前に、一通の書類が差し出された。署名以外はすでにすべて書きこまれた「辞職願」だった。

「一身上の都合」という退職理由をちらりと見なが

ら、渡されたペンを呆然と手に取ると、重役の一人がこう言った。

「マスコミに表沙汰にならないかぎり、君を背信行為で告訴するようなことはしないつもりだ。だから君も、自分から漏らすような馬鹿な真似はくれぐれも慎んでくれ」

告訴はしない。……つまりそれが、精いっぱいの情けというわけだ。

当然のことながら、退職金も支払われないだろう。

康夫は何の保証もなしに、一瞬にして失業者になってしまったのだ。それどころか、よく考えてみると、住むところにすら困ることになる。今住んでいるマンションは社宅。数日中には明け渡さなければならぬの  
だろう……。

これから、どうすればいいんだ……。

康夫は混乱した頭で、考えた。そして、今後の身の

振り方以前に、もっと大変な問題が横たわっていることに気がついた。

いったい、豊子になんと言ったらいいんだ……！

もし、あの、気が強くて感情的な豊子が、この経緯を知ったら、何をしでかすかわからない。

できれば、言いたくない。しかし、言わないわけには……。

「お帰り」

康夫が玄関ドアを開けると、いつもなら絶対に迎えに出たりしない豊子が、あたかもそこで待っていたかのように声をかけてきた。

「……た、ただいま」

びっくりと思わず体を震わせながら、康夫は何とか平生を装って言った。

靴を脱ぎ、うつむいたまま上がろうとする。

すると、豊子の巨体が行く手をふさいだ。目を上げると、腰に手をあてがい、仁王立ちした豊子は、こちらを見おろし、にらみつけている。

「……で、あんた、どうするつもり？」

そのどすのきいた声に、康夫は思わずかたづを呑んだ。

「……も、もう、知ってるのか？」

「さつき、総務部から電話があったわよ。一週間以内

「ここを引き払えって」

康夫は目の前が真っ暗になるような気がした。

「い、いや、つまり……その、僕は騙されて……」

「そんなこと、わかってるわよ。あんたには、悪いこととする甲斐性なんてないんだから」

「そ……そうさ」

「なにそれ？ そんなふうだからダメなんじゃない。

どうせクビになるんなら、私腹を肥やした上でクビに

なる方がよっぽどましよ。馬鹿！」

豊子は吐き捨てるように言うと、それ以上話もしたくないというふうに残るを向き、リビングへ入った。

「ちよ、ちよっと待ってくれよ。お前たちには苦労はかけない。すぐ、次の仕事をさがすから」

康夫は、あわてて豊子の後を追った。

「今は、求人難なんだから、就職先なんて、いくらでもあるさ」

リビングのソファにそっぽを向いて座った豊子に取り入るように康夫は言った。

「なに言ってるのよ。あんた、学歴だつてたいしたことないし、仕事の実績があるわけでもない。そのうえ三十過ぎよ。今と同じだけ稼げる口があるとしても思ってるの？」

「工員でも、ガードマンでも何でもやるよ」

「住むところはどうするのよ。私、今より貧しい暮ら

しをするなんて、ぜったいイヤよ」

「だ、だから、それもなんとかするって」

康夫がそう言うと、豊子は鼻で笑うような表情をした。

「なんとかなんてできるわけないじゃない。あんだ、自分が見えてないのよ。ところであんだ、不思議だと思わない？」

「……え、なにが？」

「あんたがクビになったって聞いたのに、私がこんな  
に冷静なわけ」

どこが冷静なものか。

康夫はそう思ったが、豊子の言うことも、たしかだ  
った。いつもの豊子だとしたら、今ごろ自分は、全治  
一か月くらいの傷は負っている。

こいつ、いったい、何が言いたいんだ……？

「あんたには、もう、いい『仕事先』があるじゃない」

豊子は、にやりと笑って言った。

「……へ？」

「あの中国人よ。あの人が持ってきた話がなかったら、私、今ごろ、怒りで、あんたを殺してるわ。信用金庫クビになったんだったら、ちようどいいわ。あの話に乗りましたよ」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ。お前、それはないよ。あんなめちやくちやな話。僕に女になれって言うんだ

ぜ」

「いいじゃない。べつに命取ろうっていうわけじゃない。その香港の金持ちが死ぬまでの間、たった二年。

二年よ。それだけ女のフリしてれば、あんたが一生働いたって稼げないのお金が転がり込んでくるんだから。そんなチャンス、あんたには二度とないでしょ」

「お、おい、いくら僕が失業したからって……」

「お黙り」

声とともに康夫の二倍の面積はあろうかという豊子の顔が迫ってきた。

「……で、でも……」

声を震わせて康夫が言うが早いか、豊子は康夫の胸ぐらをむんずとつかみ、その顔につばきのシャワーを浴びせながらわめいた。

「クビになったばっかりの能なしのあんたが、口ごたえなんかするんじゃないの！」

その剣幕に、康夫は震え上がった。

その時だった。

「ただいま」

玄関から百合の声が聞こえた。

康夫は助かったと思った。

このままでは、力づくで豊子の言いなりにされてしまふ。百合に話そう。百合に話せば、豊子に反対してくれるだろう。百合は豊子なんかとちがって、十四歳

の純粋な少女。いくらなんでも、自分の父親が女にされるなんて馬鹿なことに同意するはずはない……。

「……あれ、またけんか？」

部屋に入るなり、二人の様子を見た百合が、あっけらかんと言った。

「……そ、そうなんだよ、百合。ママったら、むちや言うんだから……」

しめつけられた喉を絞るようにして、康夫は百合に

助けを求めた。

「ああ、パパが女の子になるって話？」

「……えっ！」

百合の言葉に、康夫ばかりか豊子も驚いたらしく、襟首をつかんでいた手をはなした。

「お前、どうしてそれを……」

床に崩れ落ちながら、康夫がそう言った時、百合の後ろにもう一人の人物が現れた。

「アンドさん、だいじよぶあるか？」

「あ、あんた……」

陳だった。

「学校の帰りに、このおじさんに呼びとめられて、車で送ってもらったの。すごいよ。ロールスロイスのリムジン。車の中で、おじさんから話は全部聞いたの」「あんた、娘にまでそんな話を……」

体をさすって起きあがりながら康夫が言うと、陳は

平然とこう言った。

「その方が手間省けるあるね。現に、あなた今、お嬢ちゃんに、その話しよう思ってたある。ちがうあるか？」

「そ、そりや……」

言いかけたが、陳の言葉が凶星だったので、言葉を呑み込み、康夫は百合の方を向いてつぶけた。

「な、百合、ひどい話だろ」

「どして？ ステキじゃない」

「……へ？」

「お金持ちの紳士が、死んだ妻の生まれ変わりの男を愛する。リインカーネーションね。ロマンだわ」

百合は中空を見つめ、夢見るように言った。

「ゆ、百合……」

康夫はあいた口がふさがらなかつた。

「こんな美しくて哀しい話、知らん顔できるとしたら、

パパ、人間じゃないわ」

康夫は、呆然としながらも、あることを思い出した。ついこの間、百合が留守の時、英語の辞書を借り、ふだんはあまり足を踏み入れない百合の部屋に入ったことがある。その時、百合の本棚の中におかしな雑誌が並んでいるのを見つけたのだ。シヨルダーフレーズに「今、危険な愛にめざめて」と記されたその雑誌は、少女向けらしかったが、扱っているのは、主に男の同

性愛についてだった。康夫は、ちよつと気になったが、娘の趣味にまで干渉するのはよくないと思い直し、そのまま部屋を出たのだ。

やっぱり、あんな雑誌、取り上げるべきだった……。

「さあさ、陳さん、どうぞお座りください。今、お茶お出ししますから」

呆然としたままの康夫を尻目に、豊子は陳をかいがいしく接待しだした。

「いやー、おかまいいらぬある。それにしても、旦那さん、大変だったあるね。会社クビになったあるか」  
陳はソファに腰掛けながら言った。

「え、どうしてそれを？」

豊子は、驚いたように陳の顔を見た。

「私、アンドさんのこと、なんでも知ってるあるよ。ここも出ていかなきゃならないあるね。困たことね」

陳は、もつともらしく気の毒そうな顔をしてみせる。

「ええ、そうなんですよ。私たち一家は、これからどうしたらいいか……。それで……。もしよろしかったら、この前の話を……」

「あいやー、引き受けてくれるあるか」

豊子が最後まで話さないうちに、陳はうれしそうな声をあげた。

自分を無視して急転直下、話が進展しているのに気づいた康夫はあせった。

「ちよ、ちよつと……」

しかし、康夫の言葉にかぶせるようにして、陳はつづけた。

「すぐに引っ越しできるように、都内の一等地にマンションひとつ、用意させるあるよ」

青山のほど近く、超高級マンションの最上階全フロアを使った5LDK。それが陳が用意した部屋だった。

「うわー、すつごーい」

部屋に入るなり、百合が感嘆の声をあげた。

康夫が信用金庫をクビになった翌々日の夕方、安藤一家は、もうそこに連れて来られていた。

「身ひとつで来ればよろしある」という陳の言葉に、社宅の後始末は陳の手下に任せ、貴重品や身のまわりの品だけを持っての転居だ。

陳の言葉どおり、マンションにはすべての家財道具

が揃っていた。それも高級調度ばかり。ペルシャ織の絨毯。ヨーロッパ製らしい家具。広いリビングには、なんとグラランドピアノまで置かれている。

「ここが奥さんの部屋あるね。そしてこっちがベッドルーム」

案内してきた陳が、まるで不動産屋の親父のように部屋の中を説明する。

「こ、この部屋全部が、私たちのもの……？」

さすがの豊子も、部屋の立派さに愕然とし、熱に浮かされたようにつぶやいている。

「あ、ここが私の部屋なんだ」

部屋のあちこちを勝手に探索していた百合が、あるドアを開けて中に入った。

「テレビやステレオ、それに洋服まで全部揃ってる。わあ、すごくかわいい服ばかり」

「お嬢ちゃんに合わせて、高級ブティックに見立てさ

せたあるよ」

自分の部屋の中ではしやぐ百合に向かって、陳は大きな声で言った。

「こっちがアンドさんの部屋と寝室あるね」

陳は、いまだポカンと口を開けたままの豊子と、ふてくされている康夫を招いた。

陳に続いて部屋に入った康夫は、思わずめまいに襲われた。

そこはどう見ても若い女性の部屋だった。上品な花柄の壁紙と絨毯。パステルカラーのソファ。レースのカーテン。奥のベッドルームに入ると、ピンクのカバーのかかったベッドと、かわいいシェードのついたサイドランプ。さらに大きな鏡のついたメイキャップテーブルとチェストが置かれ、一面の壁はすべてクロージェットになっている。

「アンドさんにはどんな服が似合うかさっぱりわから

なかつたあるから、いろんなもの揃えさせたあるよ」  
陳はそう言つて、大きなクローゼットの扉を開けて  
みせた。

そこには、カジュアルなワンピースから、スーツ、  
そして色とりどりのフォーマルドレスまで、何十点と  
いう女性用の衣類が、まだタッグがついたままでかけ  
られている。チャイナドレスだけでも、五枚はある。

「こ……これを、僕が……」

康夫は頭がくらくらしてきた。

「そう。明日午後、主人の王大人がアンドさんに会うために、日本に来るある。奥さん、その時までには、アンドさんに似合う服決めておくよろし」

「ええ、精いっぱいおめかしさせてお待ちしますわ」  
豊子が揉み手をするように答えた。

「し、死ぬ。助けてくれー」

康夫は断末魔の声をあげた。

胸から腰まで一体となったコルセットの背中のホックを、豊子が満身の力を振り絞ってとめる。そのハードな下着に締め付けられて、康夫の肋骨はぎしぎしと音を立てている。

「うわー、このパッド、本物みたい。乳首まである」  
「ゆ、百合、やめろ。パパになんてことするんだ……」

前からは、百合がバスタのカップにシリコンゴム製

のパッドを差し入れている。

王龍星が訪ねて来るといふ日の朝。康夫が目覚ますと、部屋に入ってきた妻と娘は、康夫が着ていたパジャマ（それも花柄の女ものだ！）をふたりがかりでいきなりひん剥いた。そして、チェストの中にあつたたくさんの女性用の下着から、いくつかを選び出し、ベッドの上に並べた。

「さあ、これを着るのよ」

康夫はもちろん必死の抵抗を試みたが、結局、豊子に羽交いじめにされ、百合にシェープアップパンツとパンティストッキングを無理矢理はかされた。

もちろん百合は、モロに露出した父のそれを、見ないように目をそむけながらその作業をしたのだが、けっして嫌がってはいない。「パパが、どんな女の子になるか、楽しみね」とか言いながら、けっこう面白がっているのだ。

どこかで、この子の教育をまちがえたらしい……。康夫はどうしようもなく情けない気分の中で、そう思った。

少々出っ張っている腹を締めるためにと、そのクラシクなコルセットを着け終えた頃には、康夫はもう抵抗する気力さえ失くしていた。

「やっぱり、チャイナドレスよね」

康夫は二人にされるがままに、ドレスを着せられ、

鏡の前に座らされ、化粧された。

「あ、来たわよ」

窓辺で下の道路をのぞいていた百合が言った。

「いやだよ、こんな格好、人に見られるのは……」

ソファにぐったりと座った康夫は、最後の力を振り絞って言った。締めつけてくるコルセットに、まともに息すらできない。酸欠で気を失わないのが不思議な

くらいの状態なのだ。

「さ、立って。にっこり笑ってお迎えするのよ」

豊子に無理矢理立たされた康夫の頬に、ウイツグのロングヘアが、はりついた。苦しさに顔じゆうからにじみ出た脂汗と、それを隠すために何重にも塗られたファンデーションのせいだ。

ドアのチャイムが鳴った。

「どうぞ、お入りください」

豊子がよそ行きの声で言った。

ドアが開き、陳が、そして、その後背の高い男が入ってきた。

その男が入ってきた瞬間、部屋の中の空気が変わったような気がした。

豊子と百合に、両脇を支えられ、やっと立っているような状態の康夫すら、その男の顔を食い入るように見つめてしまった。

「私の主人、王龍星大人あるよ」

陳が言った。康夫たち三人は、さらに言葉を失い、男を呆然と見た。

陳の話では、王は六十を越えている老人ということだった。なのに、目の前にいる男は、どう多めに見ても四十にしか見えない。しかもとびきりの美男子なのだ。

そう、俳優のジョン・ローンをもう少し渋くしたよ

うな感じと言ったらいいか：：豊かな漆黒の髪、ほりが深く端正な顔立ち、一八〇センチはあると思われる身長、がっしりとはしているがあくまでしまった体躯：：。

「：：すてき」

康夫の隣で百合が思わず呟いた。その目はうっとり  
と潤んでいる。

「こんにちは」

陳とはちがい、王は、きれいな日本語で言った。

「大人、こちらが康麗様の生まれ変わり、アンドさん  
あるよ」

陳に言われ康夫の方を見た王は、最初、戸惑ったよ  
うな表情をした後、愁いを秘めた悲しそうな顔でうつ  
むいた。

康夫には、王の反応の意味がよくわかった。王は康  
夫を見て落胆したのだ。

ぐったりと精気のない顔。浮いた厚化粧。ノースリーブのチャイナドレスから脇毛がはみ出し、スリットの間から見える脚には、ストッキングに押さえつけられたすね毛が渦を巻いている。

こんなものを見せつけられれば、たとえ「妻の生まれ変わり」などという奇妙な思いこみのない男でも嫌になるにちがいない。

ま、いいじゃないか。これでこんなばかばかしい茶

番劇も終わりだ……。

康夫は、恥ずかしい思いをしながらも、そう考え、ほっとした。

「私は、あなた方に申し訳ないことをしてしまったよ  
うだ」

王が流暢な日本語で言った。

「失礼だが、私の妻、康麗はこんな醜い女ではない。

たとえば尊敬する占術師にどう言われようが、私は、こ

の人を妻だと思ふことはできないだろう。私の馬鹿な考えにあなた方を巻き込んでしまったことを許していただきたい」

王はそう言うと陳の方に向き直った。

「陳、この方たちには、それ相応の謝礼をさしあげてくれ。私はこれで失礼する」

王はこの場にいたたまれないというように、肩を落とし、ドアに向かった。

「待つてください！」

豊子が叫んだ。

振り向いた王に、豊子は早口でつぶけた。

「昨日の今日ですもの、いきなり奥様と同じような『女』を期待するのは無理ですわ。どうか、半年。半年猶予をください。その間に私が、夫を驚くほどの美女にしてみせます」

いったい何を言い出すんだ……。

康夫は、豊子を見た。

豊子は必死だった。せつかく手に入れたこの優雅な暮らしを失いたくないのだ。

「そうだわ、おじさま」

百合だった。

「私も協力して、パパを可愛い女の子に変えてしまおうわ」

百合は、うっとりとして王の顔を見つめながら言った。

それは一四歳の少女の目というより、恋する女の目だった。

Chapter3

『スペインの雨』

「やあ、また忙しいようだな。今日も三度国際電話を入れて、四度目にやっと自宅にいる君をつかまえたんだから」

「ああ。福建省のコンビナートのプロジェクトが動き

出したんでな」

「それだけ本国へ資本をつぎ込んで、回収できるめどがあるのか？」

「いや、それは心配してないよ。それに、この投資はじつは私の資金ではない。私はただの仲介役にすぎんのだ」

「とうとうと……台湾のアングラマネー？」

「そんなんじゃない。君も華僑のわりにはものを知ら

んな」

「私は建国以来のシンガポール人でね。しかも医者だ。本国や台湾の経済に、さほどの興味はないさ」

「出所は台北だが、ちゃんとした金さ。台北政府は今や公然と福建省への投資を推進しているよ。それが、アメリカや香港を通っていくというわけだ」

「なるほど、そういうことか。香港や台湾は、自分たちが生き残るために、本国に、実質的に資本主義地帯

をつくつてしまおうというわけだ。華南を変質させて、北京の統制が効かないようにする。できれば、中国のエリツインをつくり出そうと……？」

「それは、まあ、言い過ぎかもしれんが……」

「君が香港を離れんのは、そこに希望をつないでいるということだな」

「ま、これはわれわれにとつて、大きな賭けなんでね」  
「なるほど。資本家はしぶといねえ。……そうそう、

電話したのはその賭けの件だ。例の賭けの方は、どうやら君の負けのようだな」

「ほほう、どうしてだ？」

「陳からの報告書によれば、例の男は女装しても、とても女には見えなかった。それで、君もすごすごと日本から帰って来たというじゃないか。どういう手を使ったかは詮索せんが、あの男に職場を辞めざるを得なくさせて、その結果が、これではね」

「君も鈍いな。あれはすべて計画どおりさ。陳のレポートにもあったろう。今、例の男の女房は、せつかく手に入れた優雅な暮らしを守るために、必死になって亭主を女にしようとしている」

「まあ、君が、負けを認めたくない気持ちはわかるがね。……」

（立つなよ。お願いだから……）

康夫は、必死になつて堪えていた。にもかかわらず、その小さなパンティの上のラインから、康夫のものが、むくむくと頭をもたげ、はみ出してくる。

施術台の上に、パンティひとつの姿で仰向けに寝た康夫の体をオイルマッサージする三人の若いエステティシヤンの目にも、それはしつかりと見えているはずだ。エステティシヤンたちは、なに食わぬ顔でつづけているが、康夫は恥ずかしさに生きた心地がしない。

これは、拷問以外の何物でもない。

康夫はそう思った。

だって、そうだろう。三人の若い女性——それもすこぶるつきの美人ぞろいだ——に、体じゅうを撫でまわされているのだ。一人など、康夫の両方の乳首のあたりを、そこに肉を集めるとでも言うように揉みつけているし、一人の手は、さつきから内腿を蛇行している。これで立たない男がいたら、そいつはまちがい

なくインポだ。

たとえばこれが、どこか、風俗関係の個室なら、康夫だって遠慮はしない。でもここは、東京でも超一流だと言われるスノビツシユなエステティックサロン。

腰を振ることなどもちろん、吐息を漏らすこともはばかられる。ただ体を堅くして耐えているほかないのだ。

しかも……。

「お嬢様、もつとりリラックスしてください。それとも、

どこか痛みますか？」

康夫の苦しそうな表情に気づいて、声をかけたエステテイシヤンに、康夫はか細い声で答えた。

「い、：：いえ」

陳にどう言い含められたのか知らないが、エステテイシヤンたちは、康夫のことを「お嬢様」と呼び、完全に女として扱う。これは、このエステに限らない。

同時に通いだしたフィットネスクラブのインストラク

ターたちも、きれいなファルセットうら声を出すために通わされて  
いるボイストレーナーの先生も、すべてそうなのだ。  
たぶん大金をつかまされ、そう芝居するように言われ  
ているのだろう。

いくらばかばかしいと思っても、相手がこうも大真  
面目に接してきては、「やめてくれ」とは言いにくい。  
なんだか雰囲気に吞まれ、言われるままになっ  
てしま  
うのだ。まあ、そこが康夫の康夫たる由縁なのだが：

∴。

(これもみんな、豊子のせいだ∴∴)

康夫は情けなさに、唇を噛んだ。

王に「半年で夫を女らしくしてみせる」と言ったものの、豊子になんらかの目論見があつたわけではない。そこで、困り果てた豊子は、陳に相談した。

「なにかいい方法をご存知ありませんか？」

豊子の問いに対して、陳は、まるで用意してでもない

たかのように、このエステや、フィットネスやボイス  
トレーナーを紹介した。しかも、それらの場所に行っ  
てみると、すでに陳から話に通っていて、代金まです  
べて払い込まれていたのだ。その上、そこに通うのに、  
陳は手下たちに毎日、例のリムジンで送り迎えさせて  
いる。

康夫は、陳が張りめぐらせた罫に体よくはめられて  
いるだけのようだが、欲に目がくらんでいる

豊子は、そんなこと、気にもしない。ひたすら、嫌がる康夫を力づくでリムジンに乗せるのである。まるで、わが子に塾通いを無理強いする教育ママのように：  
。

（まったく、なんて女だ。）

できるだけ自分の体から意識をそらすために、康夫がそんなことをあれこれ考えていると、オイルマツサージを終えたらしいエステイションが話しかけてき

た。

「お嬢様、今日のメニューはあと、海藻マツサージとフエイシャルパックとフエイストリートメントですが、その前にムダ毛処理の残りをやっておきましょうね。おみ脚と脇の下の永久脱毛はおおかたできたんですが、あと、お顔の方が少し残ってますから」

というわけで、午前中はエアロビとボイストレーニ

ング、午後からはエステ、時に美容院というのが、現在の康夫の日課である。しかし、康夫が強いられているのはそれだけではない。家——例の青山の高級マンションだ——にいる時間帯は、豊子と、娘の百合に徹底的に「管理」されるのだ。

それがどんなものなのか。康夫がこんな暮らしをはじめてほぼ一か月目の、ある朝の光景をのぞいてみよう。

「パパ、起きて」

部屋に入ってきた百合は、ベッドの上で丸まっていた康夫の布団をはぎ取った。

「さあ、シャワーを浴びてきて。毎日かつらをかぶってるんだから、よくシャンプーするのよ。それから、リンスも忘れちゃだめ」

絹のネグリジェを着た康夫は、眠い目をこすりなが

ら、バスルームに入る。

百合に言われたとおり朝シャンし、腰にタオルを巻いて出てくると、百合は、下着や服を用意して待っている。

「ほら、またそんなタオルの使い方して。女の子は、こう、バストの上から巻くのよ。：：じゃ、下着を着けて。私、むこう向いてるから」

そう言って百合が後ろを向くと、康夫はしぶしぶパ

ンテイを手にとり、身につける。そして、げんなりした顔でブラジャーに手を通す。

それを見計らったようにまた振り向いた百合が、康夫の後ろにまわり、ホックをはめるのを手伝う。

「このブラ、ここんとくにリボンがついてるの。かわいいでしょ」

前にまわった百合は、ブラカップの上の小さなリボンをつついた。シリコンパッドがぶるると揺れた。

「今日はキャミソールね。ミニスカートだから、その方がいいでしょ」

「えっ、そんな短いのはくのか？」

ふてくされたようにキャミソールをかぶった康夫は、百合が両手でぶら下げている黄色いスカートを見て、初めて口を開いた。

「こういうのにも挑戦してみなきやだめよ。すねはもうきれいに脱毛されてるんだから」

「だって、お前、パパは……」

康夫はそこまで言っ、後の言葉を口の中にもごもごと呑み込んだ。

寢室に、豊子が入ってきたのだ。

「なにぐずぐずしてるの。百合だって学校に行く準備があるんだから、いい加減で、服くらい自分で選べるようになんなさいよ」

康夫はしかたなく、そのミニスカートと、花柄プリ

ントのブラウスを身につけた。すでにこれまで、ここで何度か文句を言って、豊子に腕をねじ上げられているのだ。

「さあ、次はお化粧よ。ここ座って」

∴∴。

豊子にメイクされ、康夫がダイニングに出てくると、すでにグレーのジャンパースカートに着替えた百合が朝食をとっていた。陳が転校手続きをとったお嬢様私

立中学校の制服である。

康夫がテーブルにつくと、豊子は、その前に小さな器をさしだす。

「えっ、これだけかい？」

レタスとプチトマトのサラダが小さく盛られているだけ。ドレッシングすらかけられていない。

「なに言ってるの。あんたの体重、やっと四五キロなのよ。目標の半分もシェープアップできてないじゃない

い。身長が一五五センチしかないんだから、せめて四〇まで落とさなきゃ。エステの先生もそう言ってたわ」  
「そんな……」

康夫はまた、恨めしそうに口の中でつぶやいた。

基本的に「食っちゃ寝」の贅沢な生活で、自分自身はまた一〇キロほど太った豊子は、生ハムやカマンベールチーズを目いっぱいはさんだフランスパンにかぶりついている。

「あれ、パパったら、また股を開いて座って。ミニスカートはいてるんだから、おかしいわよ」

コーヒーを飲みながら、テーブルの下をのぞき込んだ百合が言った。

「とじなさい！」

豊子の声と同時に、その手が康夫のむき出しの腿を強くはたいた。

エステのおかげで以前よりずっと白くなっているそ

の肌に、豊子の大きな手のあとが残った。

康夫はもはや反論する元気すらなく、膝を閉じ、レタスを一枚口に運んだ。

「ねえ、ママ。私、ちよつと考えたんだけど……」

コーヒーを飲み終わった百合が言った。

「パパったら、見かけは少しは変わってきたけど、ちつとも女の子らしくならないでしょ。これって、私たちの接し方に問題があるんじゃないかしら」

さすがに豊子の虐待を見かね、百合が助け船を出してくれたにちがいない。

康夫はそう思った。しかし、それは康夫の甘い期待に過ぎなかった。百合はつづけてこう言ったのだ。

「私はパパのこと『パパ』って呼んで、ママは『あんな』って言うでしょ。これじゃ、パパだって、その気になれないんじゃないかしら。私たちもエステのおねえさんたちみたいに、パパのこと、もつとちゃんと女

の子として扱ってあげた方がいいんじゃない？」

「それもそうね。でも、なんて呼ぶんだい？」

「ジェニファーっていうのはどうかな？」

「え、ジェニファー……？」

「うん、陳のおじさんに聞いたんだけど、香港の人っていうのは、中国名以外に、たいていクリスチャンネームを持ってららしいの。ジャッキー・チェンのジャッキーみたいだね。それでね、例の康麗っていう女の

人のクリスチャンネームが、ジェニフアーだったんだ  
って。王のおじ様もそう呼んでたらしいわ。それなら、  
いつそのこと、パパのことでもジェニフアーって呼んだ  
らどうかnao思っ

「ふうん。いいわね、それ」

「でしょ。今日からそうしましょうよ。じゃ、私、学  
校行くわ。ちゃんと、ママの言うこと聞くのよ、ジェ  
ニフアー」

百合はにっこりと笑って、テーブルを立った。

康夫はほとほと情けない思いで、味のないレタスを噛んだ。

もちろん、康夫とて、ただ手をこまねいて、こんな状況に甘んじていたわけではない。

豊子に反抗することこそ、早いうちにあきらめてしまったが、闘争がだめなら、逃走という手段があった。

豊子のすきをつき、逃げ出せばいい。あとのことなんて知っちゃいない。浮浪者にでもなる方が、こんな生活をつづけるより、よほどましだ。そう考えて逃げだしたことが何度かあるのだ。

一度は、エステの前にリムジンが横づけにされ、陳の手下の一人、スキンヘッドの大男がドアを開けた瞬間、街の人混みの中へ飛び出した。しかし、このときは、あつという間にスキンヘッドに腕をとられ、引き

戻された。

昼間は陳の手下がそばにいるから無理だと考えた康夫は、二度目は、豊子が寝静まった夜中に脱走をはかった。

ところが、部屋を出て、エレベーターへ走ろうとしたとき、柱の陰から、例のスキンヘッドが現れた。手下たちは、夜もずっと、部屋を見張っていたのだ。康夫はたじろいだが、それでも、スキンヘッドの横をす

り抜け、強行突破を試みた。そのとたん、康夫は、腹にひどい痛みを感じ、廊下にうずくまっていた。スキンヘッドは、ネグリジエ姿の康夫を軽々と抱きかかえ、ると、まるで初夜を迎えた新郎のようにうやうやしく、ベッドルームまで運んだ。康夫は、新婦のようにおびえながら、寝たふりをするしかなかった。

あのスキンヘッドを相手では、とても逃げ出せない。そう思った康夫は、三度目に、もうひとりの手下、瘦

せこけて青白い長髪の男が見張りに立っている晩を選んで、逃げた。あの男だったら、体力的には、そんなに負けそうな感じはしない。

ドアを開け、前と同じように柱の陰から長髪の男が現れたの見て、今度は、エレベーターとは反対側の非常階段めざして全力疾走した。と、その時、康夫は、背後に「風」を感じた。

そして次の瞬間、気がつくのと、そこはベッドの上で、

もう朝だった。

まるでタイムスリップにでもあったような感覚に、首をひねりながらベッドの上に半身を起こすと、背骨の真ん中あたりがぎしぎしと音を立てた。どうやら、痛みすら感じないうちに長髪の男の一撃を受け、気を失ったらしい。

あの男は、中国拳法かなにかの使い手なのだろう。文字どおり「ツボにはまった」攻撃で、眠らされたに

ちがいなかった。もしかすると、力まかせのスキンヘッドより、ずっと恐い相手なのかもしれない。

それで、康夫は、逃げ出すこともあきらめるほかなかったのだ。

しかし、そんなふうにいよいよやっているのだから、百合が言うように、康夫は少しも女らしくならなかった。

毎日のエステ通いのおかげで、顔や体の肌は、とても男とは思えないくらい白くきめ細かくなった。体も、前にも増してスレンダーになっていった。にもかかわらず、全体の雰囲気はどうしても女には見えない。

態度や仕草は投げやりで、表情も暗い。女言葉を使うように豊子に強要されれば、ただ無口になるだけ。服のコーディネートやメイクも、まったく覚えようとしなない。

積極的に女になる「意志」がないのだから、こればかりは、豊子が力づくでやっても効果はなかったのだ。そんな中で、ただひとつ、康夫が積極的に取り組み、上達したものがあつた。ピアノだ。

美容に悪いと酒や煙草も取り上げられ、「男らしいことはさせない」という理由から、好きなプロ野球中継さえ見ることが禁じられた康夫は、エステから帰ると、毎日、リビングのグラランドピアノの前に座つた。

豊子と結婚して以来、勤め先の宴会でのカラオケ以外、音楽と無縁だった康夫だが、もともと鍵盤楽器には強い。豊子と知り合った大学の軽音楽部ではフュージョンバンドのキーボードを弾いていたし、もつとさかのぼれば、中学生時代までピアノを習っていた。そもそも、結婚前には、プロになりたいとさえ思っていたのだ。

だから、何年ぶりに、基礎からもう一度やりはじ

めたにもかかわらず、康夫のピアノの腕は、めきめき上達した。昔やったバイエル、ツエルニーはあつという間にクリアし、その後、クラシックやジャズの好きな曲を次々に練習した。三ヶ月後には、相当な難曲もこなせるようになった。

非暴力不服従の、まるでガンジーのような忍耐の日々を送っている康夫にとって、これだけが唯一の心の救いとなっていた。豊子も、「女のたしなみ」として

いいことだと思ったのだろう。これには、文句ひとつ言わなかった。

そんな暮らしを送って、四ヶ月目が経過したある午後のこと。

エステから戻った康夫は、いつものようにグラランドピアノに向かっていた。

この日の曲は、ラフマニノフのラプソディをピアノ

用にアレンジしたもの。康夫の大好きな曲だ。

ところが先刻から、康夫は少し弾いては、そこで手を止めてしまう。

どうも気に入らない……。

ロマンチックでゆったりと流麗なこの曲の、品のよさが出ない。どこもまちがえず、楽譜どおり正確に弾いているのに、どこか感じがちがうのだ。ピアノの練習をはじめた三四ヶ月前なら、まだ許せる範囲のこと

だったろう。だが、曲のニュアンスにこだわりだした最近では、我慢できない違和感なのだった。

何度やってもうまくいかないのです、康夫は少しいらしてきた。

これは豊子のせいかと思った。エステで自らもアロマセラピーを受けてリラックスしきった豊子は、帰ってきてからずっと、ソファでうたた寝している。そのいびきが邪魔になっているだけかもしれない。

しかし、どうもそうではないような気もした。康夫は大きくため息をつくと、もう一度最初から、ラフマニノフに取り組んだ。

楽譜を見ながらしばらく弾いて、目を鍵盤に落とし、たとき、康夫は、その違和感が自分の手元から発しているのに気づいた。鍵盤の上の自分の指先の動きが、この曲を弾くにはポップ過ぎるのだ。

違和感の正体は、マニキュアだった。

その日のマニキュアは濃いオレンジのエナメル。朝、豊子に塗られたものだ。この色合いは、いかにもこの曲想とは合わない。

しばらく指先を見つめていた康夫は、やおら立ち上がった。自分の部屋に入った。

メイキャップテーブルの前に座り、引き出しを開ける。

毎朝、豊子にやられていることなので、康夫にもだ

いたいの手順はわかる。

除光液リムーバーをパフコットンにしませ、エナメルを拭き取る。オレンジ色がきれいになくなったところで、康夫は引き出しに並んだ五〇本近いマニキュアの中から、あの曲想に合う色をさがした。

康夫が選んだのは、パール系の上品なピンクだった。それを、爪からはみ出さないように慎重に塗っていく。

塗り終わって乾かしているとき、鏡を見た康夫は、

そのマニキュアと、着ている服が不釣り合いなのに気がついた。オレンジのニットでは、この色としっくりいかない。

どうせなら服もあの曲に合うものに替えよう。

そう考えた康夫は、クローゼットを開け、その中から、薄いピンクのシルクのワンピースを出して着てみた。

鏡を見ると、今度は化粧が気になった。シャドーや

チークがオレンジ系だったし、そもそも、だいたいにおいて、豊子のメイクは厚化粧だ。

もっと上品な顔をつくらなければいけない。

康夫は、クレンジングクリームでメイクを拭き取ると、ファンデーションからやりなおしにかかった。幸い、康夫が読むようにと、何冊かのメイクのマニユアル本が置いてあった。康夫は、その中の写真から、気に入ったパターンを選び、そこに書かれたとおりにや

つてみた。

出来上がってみると、いつも豊子がしてくれるよりずっといい感じに仕上がっているように思えた。

「ほら、僕の顔は、こうした方がずっと映えるじゃないか」

独り言を言うと、康夫は、今度はドライヤーとカー  
ルブラシをとって、髪の毛をいじってみることにした。

最近は、自毛が伸び、ほとんどウィッグを使ってい

ない。そのショートボブの毛先を、康夫は内巻きに変えてみる。もっと長い髪の方があの曲には合うのが：  
：。それでも、それなりに満足のいくものになった自分の姿を鏡で確かめると、康夫はふたたびリビングのピアノの前に座った。

自分でもびっくりした。

さっきまで、どこかポキポキ折れているような感じだったその曲が、本来の流麗さを取り戻した。康夫は、

心地よく、何度もその曲を弾いた。自分の奏でるそのメロディに酔い、いつしか自分がヨーロッパの貴婦人になったような感覚になっていた。

あまり夢中になっていたので、百合が帰ってきたのにさえ気がつかなかった。

「ああ、びっくりした。ジェニファーだったのね。私、誰か、女のお客さんが来てるのかと思っちゃった」

ピアノの脇に立って、こちらをのぞき込んでいる百

合の声に、康夫はやっと我に帰った。

「今日のジェニファーったら、すごくきれい。まるで別人になったみたい」

百合のその言葉に、返事をしようとして、康夫は、あわてて口をつぐんだ。

（「あら、そう？　うれしいわ」）

康夫は、たしかにそう言おうとしたのだった。

その日から、康夫は急速に変わった。

服は自分で選ぶようになったし、メイクも豊子には手を出させず、すべて自分でするようになった。

康夫にしてみれば、その日、練習するピアノ曲に合わせて、自分をコーディネートしているだけだということになる。重厚なクラシック曲の時はシックに、ジャズは華麗に、ボサノバの時は大人っぽく、クラシックの小品やポップスを弾くような時はかわいらしく：

：そんなふう装ってみているだけなのだ。

しかし、それだけでは理解しにくい変化もあった。

エステでいろいろ注文をつけてみたり、エアロビクスをする際、前はいやがっていたハイレグのレオタードをすすんで着けたりするのだ。

豊子や百合といるときに、女言葉を話したりはまだしなかったが、外では、男っぽい言葉づかいは絶対にしなくなった。仕草も、どことなく女らしくなってい

くようだった。

「そろそろ冬物をそろえなきゃね」

秋も深まったある日、豊子が言った。

「三人で買い物に行こうか？」

「あ、いいわね。私のも買っていい？」

百合が応えた。その日は祝日で、百合の学校も休みだったし、康夫のエステやレッスンもなかったのだ。

「いいんじゃない。陳さんからはカードを自由に使っていいって言われてるし」

「青山か原宿だったら、歩いても行けるわね」

「僕も：：行くの、か？」

康夫が、ヘアバンドから出た前髪を気にして、そろえながら言った。

「そりやそうよ。実際に着てみなくちやわからないでしよ」

「だけど……」

「あ、そうか。ここへ来てから、ジェニファー、外を歩いたことってなかったんだ。おもしろいじゃない。

最近すごくきれいになったジェニファーが、どれだけ女の子として通用するか、試してみましようよ」

「……でも」

康夫はいやがったが、けつきよく、二人に連れ出さ

れてしまった。

外出と言っても、いつもは例のリムジンに乗ってである。エステなど以外では、女装した姿を人目にさらしてはいない。それを今日は、歩いて行くと言うのだ。

（陳の手下二人は、VIPのガードよろしく、歩道の脇をリムジンでのろのろとついてきているようだったが……）

康夫は無性に恥ずかしかった。それに、人の目が恐

かった。パンプスの足元に注意を集中し、始終、うつむいて歩いた。

（いったい、僕はどう見られているのだろう。ブスな中年のおばさんくらいならまだいいが、男であることをきつとみんな気づいているんだろうな）

康夫は、生きた心地がしなかった。

だから、原宿のファッションビルのブティックに入

つた後も、豊子と百合の陰で小さくなっていた。

「冬物をいろいろ揃えたいんだけど」

「奥様のものですか？」

女性の店員が聞いた。

「いえ、三人とも」

「そうですか。奥様のものですと、やはり大きいサイズということになりますから、あちらのコーナーへおまわりください。娘さんお二人は、こちらになります」

「……えっ」

豊子も、百合も、そして康夫も、店員の言葉に驚いたが、店員はかまわず、百合と康夫を若向きの品ぞろえをしたコーナーに案内した。

豊子が離れて行ったので、店員は、二人に気さくに話しかけてきた。

「お二人ともかわいいわ。お父様似かしら。あら、こんなこと言っちゃ、お母様に失礼ね。それにしても、

お姉様の方は、本当におきれいだし……」

店員は、康夫の方を向いてそう言った後、康夫と百合の困惑した表情に気づき、あわてて、こうつけ加えた。

「あら、もしかしたらこちらが妹さん？」

その後、康夫は百合とともにさまざまな服を選んだ。最初は百合にアドバイスしてもらっていたのだが、そ

のうち、自分の方から、試着室に持ち込んで着てみたりした。

(この服はあの曲に合いそう)

(あの曲も弾いてみたいから、女の子っぽいのも買っておこう)

そんなことを思いながら、あれこれ夢中で選んだ。

先刻の店員の言葉に、なんだか自信を持ってしまったのだ。

どれくらいたっただろう。レジの上には、三人あわせて、もう三十着近くの服が積み上げられていた。特上の客に、店員はほくほく顔だ。

入り口近くで、さっき買った服に合うスカーフを選んでいた康夫が、何の気なしに店の外を見ると、そこになんと知った顔があった。

仲良く腕を組んで歩いて来る男と女。男は西寺英二。女は坪井里佳。二人とも、康夫が信用金庫に勤めてい

たときの部下である。

（あいつら、できてたのか）

里佳が、西寺の腕にぶら下がるようにして甘えてい  
る図を見ていて、康夫は、なんだか無性に腹が立って  
きた。

里佳はずっと、康夫に対して気がありそうなそぶり  
をしていた。辞める直前には、露骨に誘われたことす  
らある。

(それなのに……)

一時間前なら、決してそんなことはしなかっただろう。しかし、今の康夫は、一時間前と大きくちがっていた。

康夫は店から出て、つかつかと二人の方に近づいたのだ。

「あら、西寺君じゃない？」

康夫は、鍛えたファルセットで言った。

「……えっ？」

西寺は、康夫の顔を驚いたように見ていた。里佳は、西寺と康夫を交互に見ている。その顔に、どこか不安そうな表情が浮かんでいる。

「あら、覚えてないの？ あんなことまでしたのに。あたしって、きつと魅力ないのね。ちよつと悲しいわ」

恋人を前にして、そんなことを言われたにもかかわらず、西寺は康夫の顔を穴が開くほど見つめていた。

里佳の方は完全に動揺している。不安と、西寺に対する怒りの間を、感情が行ったり来たりしているのだ。「ならいいわ。こんなかわいい方といっしょなんですもんね。ごめんなさい。あたしのことなんて、もう忘れて」

康夫はそう言うと、くるりときびすを返した。西寺が、まだこちらを惚けたように見ている視線を感じながら。

そして、心の中でほくそえんだ。

（ほらごらんなさい。里佳、やっぱり、あたしの方が美人なのよ）

Chapter4

『君住む街で』

「ハロー、しばらく連絡がなかったが、元気にしてるかい？」

「すまん。このところ、私もやっかいな手術つづきでな」

「相も変わらず、刃物を振るっているというわけか。野蛮なことだ」

「君のように札びらを振るより、ずっと上品だと思うがね」

「ふふ、まあ、私も医者みたいなものでね。病める我が同胞のために、経済の手術の真っ最中というわけさ」

「資本の流失が続いているとは言え、香港は健康体そのものなんじゃないのかね？」

「いや、私は我が同胞と言ったんでね。単に港人のことだけじゃない」

「なるほど。中国マーケットか。しかし、結局のところ、アメリカや日本やE.Cのための手術というわけだ」

「馬鹿を言っちゃいかん。いつか、北京のお題目が効力を失ったとき、ロシアのようにならないためにも、今のうちに体力をつけておくということさ。そのために利用できるものは利用する」

「それがアメリカや日本を肥え太らせて、一方で、北京政府を延命させる。そうは思わんのか？」

「たとえ対症療法に過ぎないとしてもだ。私は、慢性病に苦しむ患者に治療を施してるんでね。君のように、健全人の体にメスを入れて、大儲けしているのとはわけがちがうよ」

「大儲け？　それは、君の方だろ。結局は、無垢な同胞からいいように搾り取って。私は、特殊な業を背負

って生きているクランケの悩みをすっぱりと解決して  
いるんだ。君にくらべたら、ボランテイヤみたいなもの  
のさ」

「しかし、そんな自然の理に反することをおおっぴら  
に許しているのは、モロッコとブラジルと、君たちの  
シンガポールくらいしかないんじゃないかね」

「それを望む人間は、世界中に確実にいるんでね。：  
：そうそう、そういえば、例の男のこと。エステティ

ツクだなんだと、ずいぶん苦勞しているようじゃないか。外見を変えるだけなら、私の所に連れてくれば、一度に解決するのに」

「ふふ、賭けの相手の手を借りる気はないよ。それに私は、西洋医学よりも先祖伝来の療法を信じているんでね。刃物を使って乱暴にやるより、内面からじわじわと、という方が好きなのさ」

「西欧的合理主義者の君が、よく言うよ。まあ、しか

し、陳のレポートによれば、あの男、だいぶ変わってきてるようじゃないか」

「ああ、そうさ。じつは私は今、この電話を日本からかけているんだ。これから、あの男と二度目の会見というわけさ。また、ひと芝居打ってこなくちゃならん」

「じゃ、いよいよ香港へ？」

「そう。これからは私の手元に置いて、女に変えていく。じわじわとね」

オレンジに近いピンク系のシャドーでアイメイクの仕上げをし、同系色のチークを軽く綿棒でなじませる。最後に紅筆で服と同じ色の口紅をさした後、康夫はもう一度鏡に見入った。

今日のコンセプトは「上品なコケット」。自分では満足できるできだと思っただが、はた目にはどう見えるのだろうか。もうひとつ自信はなかった。

この頃は、メイクしている間、時間を忘れて熱中してしまふ。今日はまた、それだけではない緊張も手伝って、いつもの倍はかかってしまった。

リビングの方から、陳と豊子と百合の話し声が聞こえる。康夫は、もつと鏡に向かって手を入れたかったのだが、ショルダーバッグを持って、メイキャップテーブルを立った。

「おー、アンドさん、美しいあるよ。とてもとても美

しいある」

ローズレッドのワンピースと、アンサンブルのケー  
プという姿で、自分の部屋から出てきた康夫を前に、  
陳はオーバーに驚嘆してみせた。

康夫は、照れを隠し、あらぬ方向を見た。

女装姿を人に見られることにだいぶ慣れたとはい  
え、こうもじろじろ見られ「美しい」とか言われると、  
どんな顔をしていいものやらわからない。それに、「僕

はなんて馬鹿なことをしているんだろう」という気持ちも、まだまだある。

「これ、化粧も何もかも、アンドさんが自分でしたあるか？」

陳は、豊子と百合の方に向き直り、聞いた。

「ええ、そうなんですよ。この頃は、全部自分でやって、私にも手を出させないんですの。ほほほ……」

「陳のおじさん。ジェニファーったら、どこで覚えた

のか、すごくセンスがいいのよ。ね、かわいいでしょ」  
豊子と百合は、まるで自分たちの手柄でもあるか  
のように陳にご注進だ。

「いっしょに歩いてると、私と姉妹にまちがわれたり  
するの。もしかして私が老けて見えるのかって、ちよ  
つとシヨツク」

「お嬢ちゃんはまだ十五。老ける歳ないあるね。女に  
なったアンドさんが、若く見えるあるよ。これなら、

二十歳前の生娘言つてもじゆうぶん通るある」

ちよつとすねたようにケープのリボンを結びなおしている康夫の顔を、もう一度無遠慮に眺めた後、陳は、どじよう髭を満足そうに撫でた。

「それじゃ、行くあるか。王大人がお待ちかねある」

「……謝謝」

ドアボーイに向かつて、陳は、中国服の両袖を合わ

せるポーズで、礼を言った。今時珍しい、その中国人然としたなりに、ロビーにいる客たちが、みんなこちらを注目している。

陳のすぐ後ろを歩く康夫は、小振りななで肩をさらに小さくし、細い足首の足を一步一步確かめるように進めた。

「王のおじ様は、どこでお待ちなの？」

エレベーターに乗ると、百合が待ちきれないという

ふうに、うきうきした口調で聞いた。

「このレストランに、特別の個室、用意させたあるね」

「へえ、さすがVIP」

百合の言葉に、康夫はなぜか、ひどく不安な気持ちになって、以前、一度だけ会った王の顔を思いだしていた。

あの時、王は、にわか女装した康夫を見るなり、端

正な顔を落胆の表情で曇らせた。六十代でありながら青年のようですらあるその顔が悲しみに歪むことで、余計うちひしがれて見えた。康夫は、恥ずかしい思いをしながらも、その顔を見てほっとしたものだ。これで、こんな茶番劇をやめられると。

しかし……。

もし今日また、王にあんな顔をされたら、自分はどんな気がするのだろう。

(…：…なんだか、ちよつと辛いような…：…え？

今、僕はいったい何を考えている？ いいじゃない

か。そうなれば、今度こそ本当にこの馬鹿馬鹿しさから抜け出せるんだ。…：…でも…：…、この半年間で僕は  
ずいぶん変わったはずだ。自分でも、きれいになった  
と思う。…：…嫌だったけれど…：…、それなりに努力も  
した。それを…：…。…：…いけない。もし気に入られ  
ていたら、僕は香港へ連れて行かれて、あの男の「妻」

にならなければいけないんだ。むしろ、奴に嫌われるようにしなければいけないんだ。でも、……。

高速で高層へ昇るエレベーターの嫌な感覚を体に感じながら、康夫の混乱は増幅した。

エレベーターが最上階で停まり、陳を先頭に、全員がレストランのラウンジに降り立った。陳が、入り口に立っていたボーイに何か言うと、ボーイはマネージャーを呼び、そのマネージャーがうやうやしく黙礼し、

特別室へと案内した。

ふだんはあまり通る客のないらしい毛足の長い絨毯敷きの廊下を、最後尾について歩いているとき、康夫は、そのわけのわからない不安に耐えきれず、ついに立ち止まってしまった。そして、すぐ前を歩く百合の袖を引っ張った。

振り向いた百合は、怪訝そうに康夫の顔を見た。

「ん？　どうかしたの？」

「……………」

何か言おうと思うのだが、何を言っているのかわからない。

(このまま、帰りたいたい)

たぶん、それが正確な気持ちだった。

すると百合は、にっこりと笑って言った。

「……あら、ジェニファーったら、恐いのね。わかるわ。でも、だいじょぶよ。今のジェニファーはほんと

に美人だもの。憎らしいくらいに。さあ、行きましょ」  
百合は、気弱な友人を勇気づけるとでもいうように、  
康夫の腕をとって歩きだした。

意に反して次第に高鳴ってくる胸の鼓動と、百合に  
その動揺を見すかされたことで、我を失った康夫は、  
引っ張られるままにその廊下を奥へと進んだ。

「やあ、いらっしやい」

すでにテーブルに着いていた王龍星が立ち上がった、笑顔で迎えた。そして、最後に百合に腕をとられた康夫が入ってくると、うつむいたその顔を食い入るように見つめ、しばし沈黙した。

「……さあ、みなさん、座るよろし」

陳の言葉で、それぞれが席に着いた。

次々に運ばれてくるフルコースを食べている間、王は、主に豊子や百合と会話を交わした。仕事にまつわ

る経済の話、日本文化について、香港の歴史……。流暢な日本語で語られるウィットに富んだそれらの話題から、王のインテリジェンスの高さがうかがわれた。

驚いたことには、百合が好きだと言ったイギリスのロックグループについてさえ、王は当を得た会話をしているようだった。百合が感心したように、さらに熱い眼差しを向けたので、それがわかった。

逆にとんちんかんな受け答えをしていたのは、豊子

だ。娘の百合さえ顔を赤らめてうつむいてしまうほど、無趣味無教養をさらけ出していた。

しかし、そんな豊子の言葉にも、王は笑顔を崩さずに聞き入った。

そしてその間、時折、真正面に座る康夫に視線を向けた。

康夫は、ただうつむいて食事をしていた。

と言っても、まともに食べていたわけではない。王

の視線に体がこわばり、銀のフォークとナイフを持つ手が、まともに動かないほどだったのだ。

（僕はなぜ、こんなに緊張し、混乱しているんだ？）

自分が、王に気に入られたいのか、それとも嫌われたいのか：：それすら、今の康夫にはわからない。王が自分のことをどう思っているのかだけが、やたら気になった。

デザートの洋梨のシャーベットがテーブルに置かれ

たとき、やっと、王は康夫に言葉をかけてきた。

「安藤さん、私の常識はずれの無理な願いに応えてくれて本当にありがとう」

王は、康夫の顔を真正面から見据えて言った。豊子も、百合も、そして陳も、黙って、その一言一句に耳をそばだてている。いよいよ今日の「お見合い」の、クライマックスなのだ。

「私は、半年前からのあなたの変わりぶりにすっかり

感心してしまいました。さつき、あなたがこの部屋に入ってきたとき、私は思わず、亡き妻、康麗の名を呼びそうになった。姿形は多少ちがうけれど、あなたが醸し出している雰囲気は、康麗に生きうつしだ」

康夫は、ただうつむいたまま、王の言葉を聞いている。心臓の鼓動が、先刻にも増して速くなっている。

「不安気で、はかな気で、そのくせ、うちに秘めた思いの強さを、自分自身持て余している。康麗も、そん

な感じの女でした。それになにより、今のあなたは、康麗に負けないくらいに美しい。たぶん、あの占術師が言ったことは、まちがいではないのだらう。安藤さん、失礼になるかも知れないけれど、私の気持ちを正確に伝えるために、今だけでも、あなたのことを『康麗』、いや、彼女の愛称である『ジェニファー』と呼ばせていただけないだらうか？」

康夫は、緊張のあまり、生唾をごくんと呑み込んだ。

王は、それを康夫の首肯と見たのだらう。言葉をつづけた。

「……ジェニファー、もし君が嫌でなかったら、一年半、残り少ない私の人生を私とともに過ごしてはくれないだろうか？　香港の私の屋敷に来て欲しい。ただ、私のそばにいてくれるだけでいい。お願いだ、ジェニファー」

低音の王の声は、最後には切々たる響きとなった。

康夫の心の中で、なにかがはじけた。

（やっぱり僕は、きれいなんだ。こんな何不自由ない男に、こんなふうになんて言わせるほどに……）

少しだけ目をあげると、整いすぎるほど整った王の視線が、康夫の心を射すくめるように投げかけられてきた。康夫は、すぐにもうなずきたい気持ちになった。

しかし、康夫の中に残っている「大人の男」としての理性が、その気持ちを押しとどめた。

(…：馬鹿な。いったい何を考えているんだ。大の男が「美しい」などと言われて喜ぶなんて。雰囲気は流されてはいけない。これはどう考えても、まともではない話なんだ…)

ふたたび目を落とした康夫は、テーブルの中央に置かれた銀の燭台をじっと見つめたまま、沈黙を守った。

しばらくそんな沈黙が続いた。そして…。

康夫にしびれを切らせたらしい豊子が口を開いた。

「もちろんお受けしますわ、王大人。ねえ、ジェニフアー」

それが、辛うじて堪えていた康夫の感情のつつかい棒を外してしまった。

またしても、強引な豊子に押し切られるようにして、康夫はこっくりとうなずいたのだ。

どんなルートを使ったのか、陳は二日後には康夫た

ちのパスポートを用意していた。そしてその翌日、安藤一家は陳と手下たちに伴われ、先に帰国した王を追うように、成田を発った。

ただ、ここで困ったことがひとつあった。

パスポートに“M A L E”と記載されている以上、康夫は女の姿のまままで通関するわけにはいかなかった。そこで、半年ぶりに背広を着て、ネクタイをしめた。ところが、どう見ても男には見えないのだ。

肩までかかった髪はともかくとして、小柄な上にさらにこの間十キロあまりも減量してしまった体と、すべすべした肌が、そんな格好をしてもマニッシュに装った女としか見えなくしていた。

鏡を見て、康夫自身も驚いた。そしてそれは、体つきや肌のせいばかりでないことにも気がついた。自覚はしていなかったが、この間の暮らしで、女っぽい仕草や表情が身についてしまったようなのだ。

「背広なんか着るから、よけい宝塚っぽく見えちゃうんじゃないの？」

百合の意見で、すったもんだの末、髪をバンダナでまとめ、ジーンズの上下にだぶだぶのサファリジャケット、サングラスというスタイルが選ばれた。そんな安手のフォークシンガーのようなスタイルで、康夫はジャンボジェットに搭乗することとなった。

まあ、それでも、まともな男には見えなかったのだ

が。

康夫がふたたび女の服に着替えたのは、香港島の南部、高級住宅地にある王の邸宅でだった。

香港は東京以上に土地がない。だから上流階級の邸宅と言っても、一般に、さほど広くはない。ところが、王の屋敷はちがった。丘の上にそびえ立つ白亜の英国ふう建築の前に、芝生の敷かれた広い庭と、テニスコ

ートやプールまでが造られていた。

四十何室かある部屋のうち、二階の七部屋ほどが、安藤一家にあてがわれた。康夫用として、庭に面したバルコニー付きの大きな部屋と、そのつづきのベッド・ルーム、そして、衣ドレッシング・スーツ装室が用意されていた。すべて、アール・デコふうのクラシックな装飾で統一されている。

同じ便で運ばれた康夫の女物の衣服が、王の使用人

たちの手で、手際よく衣装室のクローゼットに整理されるのを、康夫は呆然と見ていた。イブニングドレスやカクテルドレスなど、これまで康夫が着たことがないような服も、すでにその中に入っていた。

「おきがえ、ください。それとも、おふる、さきに、しますか？」

ここに着いて以来、康夫のそばにぴったりとくっついていた二人のメイドのうち一人が、ぎこちない日本

語で言った。顔つきからして、二人とも、フィリピンらしい。康夫たちのために、日本語を練習させられたのだろう。

「え？ ああ、じゃあ、シャワーを……」

康夫が言うと、メイドたちは、ベッドルームのさらに奥にいたドアを開けた。

そこは、大理石造りの広いバスルームだった。水瓶を持った乙女の彫刻が施されたバスタブには、すでに

湯が満たされ、部屋の中に湯気とともに、香水の匂いが立ちこめていた。寢室からしかつながつていないところを見ると、康夫のプライベート用なのだろう。

その光景をぼんやり見ていると、いきなりメイドたち、康夫の服を脱がしにかかった。

「え？：：い、いいから。自分で脱ぐから」

驚いた康夫は、彼女たちをなんとか制し、服を脱ぎはじめた。しかし、彼女たちは、その場を立ち去る気

配もない。康夫の脱いだものをひとつずつ受けとり、そこに立っているのだ。

この間、豊子や百合、それにエステティシャンなど、女性の前で裸身を晒すさらことにいくぶん慣れたとはいえ、初対面の若い女性たちにこんなに近くで見られては、やはり恥ずかしい。

康夫は、必死で前を隠して、透かし入りのすりガラスで仕切られたシャワールームに入った。

するとメイドが、「おくさま、おながし、しましよ  
うか？」と、声をかけてきた。

「お、奥様……」

康夫は、思わず口にしてから、考えた。

（そ、そうか、ここでは僕は、王の若妻、康麗なんだ）  
康夫は、今日から始まる生活を思い、シャワーの中  
でため息をついた。

（自分の意志ではないと言っても、ここまで来てしま

った以上、逃げ出すことはできない。なんとか、この暮らしに慣れなくては。女としての生活にも慣れたんだ。できないことはないだろう……)

ちよつとやけくそ気味に覚悟を決めた康夫は、ボデーシャンプーで体を洗った後、シャワールームを出た。すると、メイドたちがタオルを持って待ちかまえていた。

前だけは、さすがに自分で拭いたのだが、背中や脚

はメイドたちに任せた。

その後、康夫はバスローブを羽織らされ、衣装室の  
メイキャップテーブルの前に座らされた。

メイドのひとりは髪を拭き、ドライヤーで乾かし、  
ブラッシングしてくれる。もうひとりは、膝まづき、  
手や足の爪を手入れしたあと、マニキュアやペディキ  
ュアをする。

(……なるほど。これが、本物の金持ちの暮らしとい

うやつか)

康夫が感心していると、メイドのひとりがクローゼットを開けて言った。

「なにを、おめしに、なりますか？」

「そうね。長旅でちよつと疲れたから、楽なものにしてちょうだい」

康夫は、女っぽい言い方をしてみた。自分に対し、「おくさま」として接してくるメイドたちに、あえて

男言葉を使うのも、不自然な気がしたからだ。

用意されたショーツとパッド入りのブラを着けると、メイドはシルクの室内着を着せてくれた。

そしてメイク。

「今日は、ファンデーションと口紅だけでいいわ」  
康夫の指示にしたがって、メイドたちが何かから何までする。

鏡の中に、軽く化粧された自分の顔を見て、康夫は

なぜか、ゆったりと落ちついた気分になった。

メイドたちのいたれりつくせりのサービスののおかげばかりではない。今日久しぶりに男の格好をした疲れが、女に戻ったことで、癒されていく気がするのだ。

（僕は、女であることが身についてしまったのだろうか……）

そう思いながらも、素肌に触れるシルクの心地よさにリラックスし、かたづけをしているメイドたちを置

いて、康夫はリビングのバルコニーに出た。

と、その時、部屋のドアがノックされた。

康夫が振り向き、返事をしようとする前に、勢いよくドアが開き、やはりシルクの部屋着を着た——しかし、まったくそれが似合わない——豊子が入ってきた。

彼女もまた、メイドをひとり従えている。百合にもついていたようだから、一家三人に四人のメイドが用意されている勘定になる。

「お前たち、ちよつと二人で話があるから、下がつていなさい」

豊子は、自分のメイドと、衣装室から出てきた康夫のメイドたちに命じた。着いたばかりだというのは、もうすっかり「その気」になっている。順応性だけは高い女である。

メイドたちが出ていくと、豊子はバルコニーの康夫に近づいてきた。

「ねえねえ、あんた」

人前では康夫のことを「ジェニファー」と呼ぶ豊子だが、二人きりになると、まだ「あんた」と呼ぶことがある。そして、豊子がそう呼ぶ時は、たいていの場合、康夫にとってうれしくないことが起こるのだ。

「すごいお屋敷ね。土地家屋合わせて、日本円で時価いくらくらいかしら？」

金の話が出るのは、やはり、まちがいなく悪い前ぶ

れだ。

「それに、会社や株なんかも想像つかないくらい持つてるんでしょ、あの人」

「さあね」

康夫は、わざと気のない返事をした。

豊子は、南国の風に吹かれながら広い庭を見ている。康夫をちらりと横目で見たあと、かまわずつづけた。

「あのメイドに聞いたんだけどね。王大人には、この

財産を相続すべき人が一人もいないらしいの。例の婚約者に死なれて以来、一度も結婚してないし、内縁の妻や子もいないんだって。……ってことはよ、王大人が残す遺言どおりに財産が処分されるわけよね」

「豊子、なにが言いたいんだ？」

いやな予感が増してきて、康夫は聞いた。

「そうよ。あんたが王大人に気に入られれば、この財産を継げるってことよ。そうなれば、陳さんが言っ

たお礼どころの騒ぎじゃないわ。世界でも有数な大金持ちになれるのよ。あんた男だから、籍を入れてもらうのは無理としても、王大人に遺言を残させることはできるでしょ」

「お前ね、なに考えてんだ。あの人は、死ぬまでの気休めに、僕をそばに置いときたいだけなんだぜ。社会的な立場だってあるんだ。どう考えたって、僕に財産をくれたりするわけがないだろ」

「馬鹿ね。あんたは今、仮にも女なのよ。そして、あの人の『妻』。その立場を利用しない手はないわよ」

悪い予感は、さらに膨らんできた。康夫は、ちよつといらいらしながら、そしてじつは、おびえながら聞いた。

「いったい僕に何をしろと言うんだ？」

「どんなに偉い人だって、男の考えてることなんて単純なものよ」

なにやら確信あり気に語る豊子の次の言葉を待つて、康夫は生唾を呑み込んだ。

「セックスよ。あんた、もっと色っぽくなりなさい。王大人に近づいて、色仕掛であの人を墮とすのよ。私も手伝うから、あんた、なんとか王大人とセックスしなさい。犯されちゃえばこっちのものよ。私とあんただって、そうだったでしょ」

香港は暖かいはずなのに、康夫はひどい寒気に襲わ

*My Pure Girl*

れ  
た。  
。

Chapter5

『踊り明かそう』

「去年日本で会って以来だから、十か月ぶりか」

「この間、よく電話で話していたんで、久方ぶりという気はしないがね」

「今回は、なんでシンガポールへ？」

「まあ、いろいろとね」

「なるほど。こっちの中国系銀行家と戦略的打ち合わせというわけだ。華僑の絆は強いね」

「そう言う君だって、華僑だろ」

「私は本国への郷愁はまったくないからね。偏狭な民族主義は大嫌いだよ」

「華僑はコスモポリタンさ。世界のために働いているんだよ。私たちは、べつに民族主義で動いてるわけじ

やない」

「たしかに。中華思想で凝り固まった北京政府に対抗するためには、列強を味方に引き入れ得るインターナショナルイズムが強力な武器になるわけだ」

「ふふ、相変わらずの毒舌だね」

「で、今日は何故、私の所へ？」

「いや、君をご招待するのに、電話では失礼かと思つてね」

「私を？　香港の君の屋敷へってことかね？」

「ああ。あと少しで一年。そろそろ例の賭けの決着をつけなければならぬ」

「私に、彼を見せるといふわけだな」

「どうやら私の勝ちは、まちがいないようだがね」

「ほう、ずいぶん自信じゃないか」

「陳のレポートで、この間のことは知っているだろう。」

あの男は、もうどこから見ても女そのものだよ」

「しかし、賭けの条件は見かけだけではなかつたろう。人格的にも、誰もが疑わない『女』を作り上げることだったはずだ。そうでなければ、私は負けは認めないよ」

「だが、それをどう判断するのかね。人の心の中まではのぞけないだろ。専門家の君が会って、女に見えれば、負けを認めるべきだと思うがね」

「いや、もうひとつ重大な条件がある」

「なにが言いたいんだね？」

「ふふ、……恋さ」

「恋？」

「そう。彼が女になりきったというのなら、女としての恋をするはずだ。そんな恋心が芽生えているかどうか、決め手になるんじゃないのかね」

「いや、しかし、それは……」

ペニンシユラホテルのロビーは、広東語と南部訛のアメリカ英語、それに少なくはない日本語——そのほとんどもが若い女性の声だ——に充ちていた。

かつて映画『慕情』の舞台ともなった、ビクトリア調の由緒正しきサロンも、今ではおのぼりさんと、恐れを知らぬジャパニーズ・ギャルズに占領されているというわけだ。

そんな中で、康夫は、かの映画の中のジェニファア

・ジョーンズのように、愁いを秘めた表情で、テイー  
ラウンジのテーブルに腰掛けていた。

どういいうわけか、一人でここに取り残されてしまっ  
たのだ。

豊子は、康夫が地階のエルメスのブティックで服を  
見ている間に「ちよつと探したいものがあるから」な  
どと言ひ残して、康夫付きのメイドをお供にどこかへ  
消えてしまったし、陳の手下たちも、大量に買い込ん

だドレスを車に積み込みに行ったきり戻って来ない。

康夫は、観光客たちから顔を隠すように、白いつば広の帽子を目深にかぶり直した。なんだか、無性に心細い。

考えてみればこの一年近く、一人になったことなどなかったのだ。いつでも豊子や陳の手下のボディガードたちに監視されていた。別の見方をすれば、大事に守られていたと言ってもいい。

もちろん、康夫と言えど、三十過ぎの一人前の男。

以前なら、外国と言っても観光地で、それも、日本語がけっこう通じる場所で一人になったところで、どうということはないはずだ。

しかし、今の康夫の姿形は、二十歳そこそこのうら若き女性なのだ。

素肌に触れる生なりの麻のジャケット。その下に、白いオープントップのミニワンピース。膝頭を固く閉

じた脚は、ストッキングも着けていないのに、白く肌理細かい。その外見が、康夫自身の感覚をも左右しているのだった。

（あの人たち、早く戻って来てくれないかな……）

康夫は、あんなに嫌っていたボディガードたちを待ちわびていた。

と、その時だ。突然、すぐ側で広東語の男のささやき声がした。

「……えっ？」

康夫が顔を上げると、そこに、中年の中国人が立っていた。どうやら、康夫に向かって話しかけたらしい。

アルマーニか、それともセルツテイか、着ているスーツは驚くほど上等で、態度は紳士的なのだが、蛇のように冷たい目をした男である。いかつい感じの男たちを数人、後ろに従えてもいる。

「……もしかすると、日本の方かな？」

康夫の困惑の表情を見てとつて、男はちゃんとした日本語できいてきた。

「……え、ええ」

康夫はか細い声で言い、うなずいた。

「観光ですかな？」

「……い、いえ」

「ほう、すると、こちらでお暮らしなんだ。誰かをお待ちのようだが、もしよかったら、ごいっしょにませ

んか？」

男はそう言うと、同じテーブルにかけた。紳士的な態度とは裏腹に、有無を言わせぬ強引さである。

「……困ります、あたし……」

康夫は、後ろの眼光鋭い男たちにちらりと目をやり、言った。

「うーむ、魅力的だ。香港のことなら、何でもわかっているつもりでいたが、あなたのようにチャージング

な日本人がいるとは、ついぞ知らなかった」

男はいきなり、テーブルの上に置いた康夫の手に、その大きな掌を重ねた。康夫は驚いて手を引っ込めようとしたが、男の手はそれを許さないほど、がっちり握ってきた。角張ったゴールドの指輪が康夫の手の甲に食い込んだ。

康夫は困惑し、おびえていた。

男は、そんな康夫の顔を、さも面白そうにのぞき込

んでくる。

と、顔をそむけた康夫の視野に、戻って来るボディガードたちが映った。

(助けて……)

康夫の送った視線に気づいたのだろう。二人のボディガードは、小走りに近づき、テーブルの反対側に立った。

男もそれに気がつき、先刻までとはまたちがったう

すら笑いを浮かべ、ボディガードたちを見上げた。その背後に立つ男たちも含め、お互い一触即発の気配を漂わせている。

そんな数秒間のにらみ合いがつづいた後、男はゆっくりと、康夫の手の上からその掌を離した。そして、康夫に向かい、もとの笑顔に戻って言った。

「……なるほど。王龍星のところにいるんですか。うむ、それなら、また会う機会もあるでしょう」

「あの男には、近づかないよろし」

渋滞を抜け、一時間半以上もかけて香港島の王の屋敷に帰りつくと、手下から報告を受けたらしい陳が、康夫の部屋までやってきて、そう言った。

言われるまでもなく、もう二度とあんな思いは嫌だ  
と思ったが、康夫は興味をそそられて聞いた。

「あの人、誰なんですか？」

「葉国権います。黒社会ホツセイウイの黒幕ある」

「ホツセイ……ウイ？　つまり、香港マフィアの……」

「そう、影の大ボス。表向きは、いろんな会社持つ実業家。でも、香港の暗黒街の支配者という評判ある男。

女にも手早いという話ね。どやらアンドさん、あの男にひとめぼれされたようある。しつこい男あるから気をつけるよろし」

（と、とんでもないことになった……）

驚きに目を白黒させている康夫を置いて陳が出ていくと、入れ替わりに豊子が飛び込んできた。

「聞いたわよ。男に言い寄られたんだって」

「……い、言い寄られたなんてなまやさしいことじゃ……」

まだ呆然としたままの康夫が言うと、すかさず豊子がきいた。

「えっ、じゃ、やられちゃったの？」

「……ば、馬鹿！」

豊子の言葉に我にかえった康夫は、珍しく豊子に向かつて怒声をあげた。

「だいたい、お前がどっかへ行くから、こんなことになっただぞ」

それほど動転していたのだ。

「あら、ジェニファー、だめじゃないの。そんな言葉づかいして。あの子たちが驚いてるわよ」

豊子は部屋の隅でこちらを見ていたメイドたちの方を視線で示し、たしなめた。そして、メイドたちに言った。

「お前たち、心配しなくていいのよ。お前たちの『奥さま』は、少しナイーブになっているだけ。私が話すから、ちよつと、はずしてくれない」

けつきよく豊子は、それを理由にして、いつものように人払いしたのだ。

メイドたちが出ていくと、豊子はさっそく、康夫に顔を寄せ、言った。

「あんた、変な男の言いなりになったりしたらだめよ。あんたは大事な体なんだから」

「それは、どういう意味なんだ」

「どういうって、そういう意味よ。で、どうなの、王大人の方は？　少しは変化があった？」

「……変化って、何のことだよ」

「ベッドへ誘われるとか、キスされるとか」

「まだそんなことを言ってるのか。そんなわけはないだろう。だいいち……」

「だって、あんた、毎晩、王大人の寝間へ行ってるわけでしょ」

「いいか、はっきりさせとくぞ。僕は、好きでこんなことをしているわけじゃない。ましてや、変な趣味なんて……」

「あんだ、私の教えたとおりにやってる？」

「だから、そんなつもりは……」

「六十過ぎと言つても、王大人はまだまだ若いわ。あんなに色気さえあれば、すぐその気になるはずよ」

「色気ってね、お前……」

「やっぱり、もっと露骨にやらなきやだめなのかしら」  
「露骨って、なにを……」

「あんだ、ほんとに、どんな手を使つても王大人を

墮とす気があるの？」

「だから、それは、お前が勝手に……」

「毎日、これだけ一生懸命教えてあげてるんだから、頑張ってよね」

「だから……」

康夫の言葉の語尾がやたら「……」になるのは、豊子が康夫の言うことなど聞かず、それにかぶせるように、一人勝手に話をすすめていくからだ。そもそも、

豊子という女には、会話という概念がないのである。

で、康夫はけつきよく、いつもこんな調子で、豊子の言いなりになつてしまふのだ。そして――

「じゃあ、今日から新しいことを教えるわよ」

豊子はそう言いながら、先刻から大事そうにかかえていた細長い小箱を開けた。それを見て、さしもの康夫も、今日こそは、力づくでも抵抗しなければいけないと思つた。

「じつは今日、九龍の街で消えたのは、これを探してたからなのよ」

箱の中身は、肌色ゴム製のでこぼこした棒状物体。

はつきり言えば、男の一物の張り型だった。

「男を夢中にさせるには、やっぱり、おフェラが上手じゃなきやね」

——と、ここで、話をわかりやすくするために、香

港に来てからの康夫の毎日を紹介しておこう。

豪華な王の屋敷に暮らしていると言っても、康夫の日課が大幅に変わったわけではない。例のエステやフイットネスは、相変わらず続いていた。ただ、日本にいたときと大きくちがうのは、こちらでは、康夫が向くのではなく、エステティシャンやインストラクターたちが屋敷に通って来ることだ。王は、康夫のために彼らを高給で雇い、また、屋敷の中に、必要な設備、

器材をすべて揃えさせていた。

だから康夫は、日中のほとんどを、屋敷の中で、自分を美しくするためのエクササイズに費やしている。

外出するのは、今日のように、服やアクセサリーを買いに行く時だけだった。

その結果、康夫の体はさらにシェープされ、美しさを増していた。

それに対して豊子は、ここで出される贅ぜいを極めた食

事を、毎食、むさぼるように平らげ、さらにポリウムをつけ、いまや、西太后のような貫禄さえ漂わせはじめているのだ。その貫禄にものを言わせ、康夫に、もうひとつのエクササイズを強いるわけである。

康夫を通して、王の財産そのものを我が手に納めることを画策しはじめた豊子は、まず、毎夜、康夫を王の寝室へ送り込むことに成功した。

王も同席したある夕餐の席で、「ジエニフアーは、

ピアノが得意なんですよ。王大人にもお聞かせしたら」  
などともちかけた。さらに、王が康夫のピアノを気に入ったと見るや、すかさず、「じゃあ、毎晩、王大人がお寝みになる前に子守歌がわりに弾いてさしあげたら：：」と提案したのだ。

その上で豊子は、康夫に対し、「男をセックスに誘うための教育」をはじめた。康夫の日課の空きを見つけては、男への媚び方、甘え方、流し目の送り方とい

ったことを教え込もうとする。康夫は先刻のように抵抗を試みるのだが、結局は、それに従わされてしまう。

かくして、康夫の部屋では、毎日のように、ぶくぶくに太った大女と、チャームिंगな女装男が、二人してしなをつくり合うという奇妙な図が展開するのだ。

もしそれを、客観的に見る第三者がいたとしたら、じつのところ、教えている豊子より、いやいややっている康夫の方が、よほどセクシーなことに、すぐ気がつ

いたはずだが。

「王のおじ様のお部屋へ行くの？」

夕食後、入浴とメイクを終え、楽譜を抱えて廊下へ出ると、自分のメイドとともにやって来た百合と出会った。

「さつきシンガポールから帰って、またピアノを弾きに来てくれというから」

「そう。あれ？ ジェニファーったら、ちよつと顔色が悪いみたい」

「そうかな……」

康夫はあいまいに答えた。その理由が、先刻、豊子に張り型をくわえさせられ、男への奉仕を特訓させられたせいだとは、とても娘には言えない。

「……でもいいわね、ジェニファーは」

「……ん？」

「おじ様と、毎日いっしよに過ごせて」

「なに言ってるんだ。しかたなくやってることなんだぞ」

康夫がそう言うと、百合は、なぜか力なく笑い返したただけだった。そして、

「ジェニファー、そのシルクのドレス、とてもすてきよ。王のおじ様、きっとよろこぶわ」と、そう言い残し、広い廊下を自分の部屋へ去って行った。

その後ろ姿が、何かを思い悩んででもいるように見えた。

百合は今、日本人学校ではなく、香港の名門中学校（セコンダリースクール）に通っている。英語と広東語という慣れない言葉で学生生活を送っているのだ。

（百合もやっぱり疲れているにちがいない。こんな無茶な話に巻き込んでしまったんだ。かわいそうに）

康夫は、そんなふうにも、久しぶりに父親らしい感情

にとらわれ、自分のふがいなさを呪った。

そのクラシックなピアノの鍵盤の上を、康夫の細い指がすべるように動いていた。天窓のある高い天井に、モーツァルトの華麗な旋律が共鳴する。

寝室といっても、日本式に言えば二十畳はあろうか。その中央に天蓋つきのベッドが置かれ、あとはカウチと、そのピアノだけ。一隅に造りつけられたリカーク

ローゼット以外に余分なものは何もない。マホガニー材の壁や床そのものが、すでに立派な装飾になっているのだ。

康夫は、鍵盤から顔を上げると、曲に合わせて、ゆっくりと視線を移し、やがて、王の顔を見た。

カウチにゆったりと腰掛けた王は、先刻から、軽く腕組し、目を閉じている。パジャマの上にガウンを着、リラックスしきった姿にも関わらず、王の容姿から、

少しも老いは感じられない。

確かに、永年に渡って香港経済の中心に居続けた、その存在感のようなものはある。しかし、それは、老成という手のものではなかった。いまだ現役まっただ中の、活力と自信に満ちた居姿なのだ。それに、だいち、その端正な顔に、老いが忍び寄る隙はない。

ただ、時折、りりしくも甘いそのマスクの陰に、何かとてつもなく深い孤独感のようなものが漂う瞬間が

ある。

（死の影なのかも知れないな。）

康夫はそう思った。

（元気そうに見えても、この人はあと一年とすこしの命。確実にやってくる死を前にして、不安がないわけがない。）

康夫が、この部屋へピアノを弾きに来るようになって、一か月ほどがたつが、その間、王は、いつもこん

なふうにかウチに座ってピアノを聞いているだけだ。康夫が部屋に入ってきて来る時と、出て行く時には、穏やかな笑顔で礼を言う。時に、自分がワインなどを手にしている場合は、康夫にもすすめたりするが、それ以外の会話はほとんど交わさない。あくまで静かに、紳士的に振る舞うのだ。

夜、王と女装の自分が二人きりで過ごすことに、最初はびくびくしていた康夫だったが、いつも変わらぬ

王の紳士的な態度に、この頃ではすっかり慣れ、安心してきつっている。

豊子の言う「男なんてみんな、考えていることはアレだけ」という論理は、こと王に関しては、通用しないようだ。

（でも、この人は、なんでこんなにまで頑なに、自分を見せようとしなのだろうか？）

曲は転調し、静かな中にエモーショナルな感情を秘

めた曲想へと移る。

康夫は、ふたたび鍵盤に目を落とした。和音の指使いが難しい楽章なのだ。

（この人に、死への恐怖を共有してくれる人はいない。この人は、ものすごく孤独だ。そして、それは、たぶん、過去に深い傷を負っているから……）

康夫は、王の亡き妻、康麗のことを思った。

結婚式の当日、マフィア同士の抗争に巻き込まれて

死んだというその女性のことを、王は深く愛していたにちがいない。その心の傷が、今の王の孤独をかたちづくっているのだ。

（きっと、康麗という女性は、あの葉国権のような奴に殺されたんだらう）

康夫は、何の根拠もなくそう考えた。

（そして僕は、その悲遇の死を遂げた康麗の身代わりなんだ。こんなふうにピアノを弾く以外に、この人に

してあげられることがあるかもしれない……)

曲が最終楽章に移り、康夫はふたたび顔を上げた。

と、目をつぶっていると思っていた王が、まっすぐこちらを見ていた。

目が合い、その瞬間、康夫はなぜかひどく狼狽ろうばいした。

一瞬、その端正な顔に見入り、あわてて目を反らせたが、そのせいで鍵盤をミスタッチしていた。

曲が乱れ、それが、さらに康夫を動揺させた。顔が

上気しているのが、自分でもわかった。

（いけない。これじゃあ、見つめられて顔を赤くしているみたいじゃないか。まるで、女の子みたいに：  
：。）

なんだか自分にもよくわからない感情だった。いちばん近い表現をするとすれば、それは王に対する羞恥だった。

そんな、突然襲った激しい動揺の中で、曲は終わっ

ていた。

「ありがとう、ジェニファー。相変わらず、君のピアノはすばらしいよ」

王は、カウチを立って、いつもと同じ礼を言った。

康夫もいつもと同じように椅子を立ったが、いつものように顔を上げることはできなかつた。

「じゃあ、グッドナイト」

王の言葉に、康夫は小さくおじぎをし、鍵盤の蓋を

閉じ、あわててドアに向かった。王に動揺を覚られたくない。早くこの部屋を出たいと思ったのだ。心臓の鼓動が、自分でも聞こえてくるほど昂ぶっていた。と

「ジェニファー」

康夫が部屋を出かかったとき、王がふたたび呼び止めた。ドアノブに手をかけたまま、康夫はびくりとその体を硬直させた。そして、まるで恐ごわとでもいう

ように、王の方を振り向いた。

「……はい」

「もし君がいやでなかったら、パーティーに出てはくれないだろうか？」

「……パーティー？」

「うむ。来週、総督府主催のパーティーがあつてね。

これが、英国ふうのクラシックな舞踏会のようなものなんだ。通常の財界パーティーなら、私一人でもいい

んだが、こういうパーティーは、ふつう、パートナーを連れて出るものだ。どうだろうか？」

なにより、早くこの場を立ち去りたいと思っていた康夫は、王の言葉を吟味する余裕もなく、うなずいていた。

小さなクリスタルの飾りが幾重にも吊るされた巨大なシャンデリアの下に、着飾った男や女たちが集って

いた。男は全員、黒のタキシードに白手袋を持ち、女たちも、ほとんどがクラシックな感じのドレス姿である。

康夫は、この香港総督府のレセプションホールに入ってきて以来、ずっと緊張し続けていた。

康夫もまた、この日のために誂えた淡いピンクのドレスを着ている。大きなランチヨンスリーブ、ドレープやフリルで飾られた襟ぐり、細く絞ったウエスト、

ペチコートで膨らませたスカート……。全体に、康夫に合わせ、愛らしくデザインされてはいるが、ふだんとはまたちがった、裾のこなしのむずかしいそのコスチュームが、康夫の緊張の、ひとつの原因ではあった。しかし、それ以上に、康夫は、その社交界然とした雰囲気に圧倒されているのだった。

香港財界の重鎮で、美男の独身主義者として知られる王龍星が、お伴に若い女性を連れて現れたのだ。ど

うしても、社交雀たちの好奇の目が集中することになる。香港人、イギリス人を問わず、たくさんの要人とその夫人たちが、入れ替わり立ち替わり、王と康夫に近づき、紹介を求めてきた。

英語か広東語で交わされるその会話の内容は、康夫にはよくわからなかったが、王は康夫のことを「日本で知り合った友人」だと紹介しているようだ。しかし、どうやら、たいていの相手は、その言い方を「年若い

恋人」と、とらえているように見えた。ほとんど全員が、康夫の美しさへの賛辞を、王に対して贈っていくのだ。

康夫は、その間、必死になって上品な笑顔をつくり、レディを演じつづけなければならなかった。

ひとあたり、主要な人物との挨拶が終わり、康夫が疲れきった頃、王が飲物をとりに少しの間離れた隙に、その「事件」は起こった。

「やはり、またお会いしましたね」

康夫の背後から急に語りかけたその声は、葉国権だった。

「私と踊っていただけませんか？」

康夫が振り向くと、すぐ葉はそう言った。そして、その時にはすでに、康夫の手を握り、室内楽団の優雅なワルツに合わせて踊る人の輪の中に、引っ張り込んでいた。

「……あ、だめです」

康夫はその手を振り切ろうとした。だが、その場の雰囲気から、騒ぎ立てるのははばかられるような気がし、中途半端な言い方しかできなかつた。

「あたし、ソーシャルダンスなんて、できませんから……」

「大丈夫。私がリードします」

葉は、強引に康夫の右手をささげ、その背に手をま

わしてきた。

上品に踊る人々の中に入ってしまつた以上、葉を突き放すことなど、よけいにできそうもなかつた。康夫はしかたなく、葉にステップを合わせた。

と、葉がまた話しかけてきた。

「王はあなたにどんな約束をしたんですか？　金ですか？　それとも結婚？　もし金なら、私は王の倍出しますよ」

「……」

康夫は驚いて、葉の顔を見た。

「ふふ。王も経済人としてはそうとう強引な男だ。自分が欲しいと思ったものは、どんなことをしても手に入れる。しかし、それは私も同じでね。たとえ相手が王であろうが、気に入ったら自分のものにした。どうですか？　王と別れて、私のところへ来ませんか？」

葉は笑顔をつくっていたが、蛇のような目はけっし

て笑ってはいない。康夫は、その目を心底から恐いと思った。

「だいいち、いくら若く見えても王は老人ですよ。体の方も、もうほとんど役に立ちはしないでしよう。私は王より、十歳は若い。あなたが狂うほどに悦ばせることだってできる」

葉は、露骨に下卑た表情でそう言うと、背中にまわした手を強く引き寄せた。康夫の体が、葉に密着した。

「それにもうひとつ、王と私には大きなちがひがある。たとえ王を袖にしたところで、ただそれだけのこと。

しかし、私の申し出をことわれれば、下手をすれば、あなたの身に危険がおよぶ恐れだつてある」

葉は微かに笑い声を立てた。葉の手がある背中のあたりに、寒気が走った。

その時、すぐそばで王の声がした。

「葉君、そんな下品な踊り方は、この場にそぐわない

よ。だいたい、君のような男が、ここに招待されたこと自体、信じられないがね」

康夫は救われた思いで王の方を見た。王は、いつのまにか、葉の背後に立っていた。そして、葉が振り向くと、こうつけ加えた。

「私の大切なパートナーから、手を離してくれないかね」

王は、そこまですを日本語で言った。たぶん、康夫を

安心させるための気遣いだろう。

それに対し、葉が何か広東語で言い、その後、二三、康夫にはわからない二人の会話がつづいた。別に激しく言い争っているという感じではなかった。

やがて葉は、康夫に向かいどこか忌々しげに「では、また」と言い残し、その場を離れて行った。

「だいじょうぶだったかね？」

王が聞いた。

「……ええ」

康夫が王の顔を見て大きくうなずくと、王もゆつくりとにうなずき返し、康夫の背に手を添えるようにして、ダンスの輪から外へと連れ出した。

康夫が微妙な違和感を覚えたのは、その時だった。

(……何か、ちがう。……でも、何が?)

王が手渡してくれたカクテルグラスを受け取った後も、康夫は自分の中の違和感の正体を見きわめようと

した。

そして、すでにそばにいたイギリス人と話しはじめた王の顔を見上げた瞬間、その答えに思い至った。

（そう。僕は、ダンスのつづきを王大人とするものだ  
と  
思  
っ  
て  
い  
た  
の  
に  
：  
：  
）

あの夜から二日がたった。

康夫はいつものように王の部屋でピアノを弾いてい

た。曲はラフマニノフのラプソディ。いつか、康夫が女装の魅力に目覚めるきっかけになった曲だ。

今夜、この曲を選んだのは偶然ではない。王の前でこの曲を弾けば、あの時のように「新しい自分」が見えてくる。なぜか、そんな気がしたからだ。

この二日間、康夫の精神状態はとんでもなく不安定になっていた。苦しいような、切ないような感情が、胸の中で激しく疼うずいていた。時には、自分の体がバラ

バラになってしまふような妙な感覚にとらわれたり、そして時には、突然涙があふれ出して止まらなくなつたりもした。そんなことは、もちろん生まれて初めての経験だった。

それは、はた目からもよくわかつたようだ。例の奇妙な特訓の最中、康夫が、ぼやけた焦点の目に涙をいっぱいために、憑かれたようにそれをくわえているのを見て、さすがの豊子も、気味悪がつて途中でやめてし

まったほどだ。

康夫自身も、こんな状態から早く解放されたかった。そして、このラフマニノフが、その決め手になるような気がしているのだ。

弾きはじめてすでに十分。その間、康夫はずっと王の顔を見つめている。

王はいつもと同じように、目をつぶり、カウチに腰掛けている。

美しく、切々とした情感を秘めたその曲に身を任せ  
ることで、康夫の心の中に、この二日間持ち続けた感  
情が、はっきりとした形になって現れてきた。

その曲想の盛り上がりの中で、突然、康夫は手を止  
めた。

「……どうしたんだね？」

少しの間があつた後、目を開いた王が聞いた。

康夫は、鍵盤の上の手を膝に置き直し、王の顔を真

正面から見て言った。

「王大人、答えてください。僕は、あなたにとって、  
いったい何なのですか？」

「……？」

王は不可解そうに、そして、その裏に、微かにどき  
りとしたような表情を浮かべて、見返してきた。

「僕は、この何ヶ月間か、意に反してではあっても、  
女になりきろうとしてきました。あなたの妻を演じき

ろうと努力してきたつもりです。それは、あなたが、  
そうして欲しいとおっしゃったからです。それなのに、  
あなたは、少しも僕の方を見てはくださらない。……  
いえ、気をつかってはくださいます。でも、それだけ  
です。本気になって、僕の方を向いてはくださいませ  
ん。あなたの望んでいたことは、そんなことなのです  
か？　……。僕は……あたしは、きれいになったあた  
しを、もつと見て欲しい……。そのことで、すさんだ

あなたの心を癒せるものなら、癒してあげたい……。  
それなのに……。あたしには、まだ魅力が足りない：  
？ それとも……。あたしが、本当は男だから……。？  
お願い……。もう、弄もてあそぶのはやめて。あたしのこ  
とを、抱きしめて。あたしを、あなたの、本当の妻に  
して……。」

途中から涙声になっていた。そうだったのは、康夫  
が意識してしゃべったことではないからだ。康夫

は、何の計算もなく、自分の心の声を素直に言葉にしただけだったのだ。そして、それだから、最後に自分が出した結論に、自分自身が驚いていた。

あふれる涙は、そのせいだった。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまでを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はずぐ)、ダウンロードが可能となります。

## 完全版を入手する

# マイ・ピュア・ガール

My Pure Girl

<公開版>

CopyRight 1992 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500